
世界のカタチ

莓みるく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界のカタチ

【Nコード】

N8564D

【作者名】

莓みるく

【あらすじ】

天界に住むリアラは、大の人間嫌い。それでもファイ（神様）にお願いされてしぶしぶ地上、始まりの地へと降り立った。闇と魔がじわじわと侵食していく中で、リアラが見つけた光とは……。

第1話：始まり（前書き）

差し伸べてくれた手が暖かかったから・・・。
その手が僕の光だったんだ。

第1話：始まり

「ファイー。呼んだー？」

元気な声とともに空から1人の少女がフワリと舞い降りた。
年は8〜9歳と幼く見える少女。

肩より少し長い髪はその場に似合わない漆黒の色をしていながらも美しく輝いている。

緑色の大きな瞳は翡翠の宝石を埋め込んだかのように美しく、見つめる者すべてをひきこんでしまうかのようだ。

ファイと呼ばれた者は優しく笑い少女に声をかける。

「リアラ、またルチアと喧嘩したんだって？」

「だって、さつきね、東の海の竜王グワシャの孫が生まれたっていうから深海までお祝いに行ってきたの。」

その帰りんだけど、1人で帰らせたらルチアったら迷子になってるんだもん。

しかもまだその時の事根にもってるし……。」

「ルチアはリアラの弟でしょう？なんで一緒に帰ってきてあげないの。」

「ファイ？甘やかすだけじゃダメなんだよ。いつまでも手を引いてばかりじゃルチアは成長しないでしょ？」

深海くらい1人で行けるようになってないと、いざと言ったとき困るのはルチアなんだよ。

でも、ファイが甘いのは悪い事じゃない。ファイはファイのまま僕はその他のやるべき事をやるまでさ。」

えへっつと子供っぽい笑顔をうかべながらリアラは照れくさそうに言う。

「リアラ……。」

ファイはリアラの頭を優しくなでる。
いつの間にかリアラは黒い猫の姿になってファイの膝の上にちょこんと乗っていた。

「やっぱりこの姿で撫でられるのが一番気持ちい。」
喉をゴロゴロならしながらくつろぐ。

「で？本当は何の用事だったの？」
リアラが本題を切り出した。

ファイは少し間を置いたあと、話し始めた。

「リアラには地上に行ってもらいたいんだ。」

その言葉にリアラの尻尾がピクつと反応した。

「また魔物？」

「そう。それも、始まりの地……。」

「始まりの地まで魔物が入るようになったんだ。」

どこまで人間は愚かなんだろうね。

もう、人間の事気にするのなんかやめなよ。

ファイが気にしてもしようがないよ。もともと魔に飲まれる運命だったんだ。

未来は、変わらない。」

「リアラ……それでも、我が子を愛おしまない親がいようか。」

ファイが悲しそうに笑った。

「……分かったよ。」

……ファイにあんな顔させたかったわけじゃない。
でも、やっぱり僕は人を好きになれないんだ。

今より遠い遠い昔、4度僕は地上に降り、人としての人生を送った。
ファイいわく人間を知るための修行だという事だった。

4回限定だったけど。

僕の魂は地上へ降り、人となるための生を受ける事となった。

まあ、やっぱり人よりは多少の能力はあったけど……。

1度目は良かった。

まだ人間という存在が出来た初めの頃で、天界てんがいのように皆が力を合
わせて生きていた。

僕の存在もファイの存在も理解し、精霊達の加護を受けながら、共
存し合い、命に感謝し、慈しむ心を持って生きていたのに……。
2度目に行った頃、僕が降り立った地にはもう魔が住み着くようにな
っていた。

世界が広がるにつれて、他種族を拒み、人間達の中で階級が出来て
いた。

別に階級制度がある事が悪いって言っているわけじゃない。

そこにはその種族の決まりはあるものだから。

ただ、僕は目も緑だったし髪も黒かったという理由だけで、生まれ
てすぐ親に捨てられた。

3度目、両親という人達は優しかった。

両親達は僕にも優しく周りにも優しかった。

だから僕も周りの人間に優しくしようって思って、怪我を負った人
や病氣の人達を治してあげた。

人のためになるその力を両親は誇りに思ってくれていたし……。
でも、その地では魔法なんてものは未知の存在、あつてはならない
ものだったらしい。

魔女と罵られ両親も殺され、僕は火あぶりにされた。

その時の人間達の酷い形相と言ったら・・・僕の見てきたどんな魔物より恐ろしかったな。

4度目、僕が生まれた国は戦争の真っ只中だった。

いくつもの死体が転がっていて、昨日まで仲良くしていた友人が明日にはもういなくなっている。

・・・そんな毎日。

数年たつて僕が生まれた国は戦争に負け、隣国の領土となった。

戦争に負けた国の人々は、ほとんどが奴隷として扱われるようになった。

僕は珍しい色合いをしていたし、外見も綺麗だったから奴隷として高値で取引された。

それからの毎日は今思い出すだけでも吐き気がする。

戦争してた頃と変わらない・・・いや、それ以上悲惨な毎日だった。

薬漬けにされ、逃げられないように足の指をすべて落とされて・・・

毎晩毎晩誰とも分からない人の相手をさせられて。

気が狂いそうだった。

いや、もう狂っていたのかもしれない。

ある日、気がついたら僕はあたり一面焼け野原の真ん中にしゃがんでいた。

何が起きたのか分からない。

ただ、心が真っ黒だったのは覚えている。

でも、ま、そんなのはほんの些細な一部でしかないんだけどね。

殺戮、侵略、絶滅・・・

容姿や考えにおいて、自分と違う者を嫌い、目に見えるモノはほんの少しでしかないのに自分達は神に選ばれし種族だとかぬかす。

欲・欲・欲・・・

魔物だって、自分達で生み出したくせに誰かのせいにして……
知らぬふり。

反省したかと思ったら、すぐに忘れ、また同じ事を繰り返す。
欲は誰にだってある。

僕にだってあるし、地上に生きる生命のすべてに欲は存在するのは
分かる。

でも、人には必要以上の欲がありすぎる。

自分達をなんだと思っているのか……

一番賢く、偉い生物だとも思っているのだろうか。

人なんて自然にくらべたら本当にちっぽけで弱い存在だというのに。
……

魔物とは地上に生きる生物の闇から生まれしモノ。

多くは人間の闇を好む。

人間は弱く強欲だから、魔にそそのかされ、闇に支配されやすいん
だろう。

魔は生物に存在する闇に巣を作り徐々に闇を食らい、本体を支配し
ていく……

大体は本体が死んだら一緒に魔も消滅するんだけど……

大きくなりすぎた魔はときたま死んだあと、本体だったモノの魂を
食らい物体化するんだ。

それが魔物と呼ばれる奴ら。

でも、最近は魔物が急増している。

‘始まりの地’まで魔物が溢れるようになっていた。

最近の魔は本体が生きているのにも関わらず、その本体の自我を食
らい、魂までも食らってしまうんだ。

時には闇に支配されて自ら魂を売り渡す愚か者までいるときた。

自らの魂を願いや欲と引き換えにして。

闇に食われた魂は輪廻へ返る事は許されず、一生暗闇を彷徨い続け

る。

そして消滅の時を待つしかないのだ。

そして、魂を食われた器は魔物と化し、他の生物の闇を食らい、生長する。

僕たちは魔の存在をレベル分けして呼んでいる。

レベル1は魔が闇に巣を作っている状態。

人間はこれが普通で、別に放つといってもなんでもない。

レベル2、魔が闇を食らい動いている状態。

レベル2になると、人間の中で言う犯罪とかに手を染めるようになる。

でも、まだ自我は残っているから制御は出来るはず……。

レベル3はほとんどの自我を食われ、闇に心を支配されてしまった状態。

こうなるともう自分でも分けの分からぬまま殺戮を繰り返したりするようになる。

レベル4は自我を失い、魂を食われ魔物と化した存在。

同族を食らい他の魂をも食らう化け物と成り下がる。

レベル5……ここまできると魔物は知恵をつける。

そして確実に力をつけていく。レベル5の中でもS・A・B・Cのランクがあつて、A・Sは相当強い。

まあ、S・Aランクは人間程度の生物はなかなかなれるもんじゃないけどね……

だからやつかいつていうか……

だいたい精霊だったものとかその地を収める王だったりする生物が魔に支配されてしまった場合だったりする。

元々の力が強かったりした分やつかいなんだよね。

そしてそれらは人間の闇や欲を食らい更に強くなっていくという……。

僕達は何もしない。

ただ見守るだけ……

浄化する力はあるけれど、何もしない。

ただ、見守るだけ。

そしてその地が滅びた時、魔を一掃し、その地を浄化し、新しい命を吹き込む。

それが僕等の役割。

人間が一番弱い……

何かあればすぐ神頼み。

自分達で生み出した魔なんだもん、自分達で何とかしろって話だよ。

精霊だつて一族から魔物が出たらたとえ一族が滅びようと魔物と戦い続ける。

そういう誇りを持つてる。

そして折れない心を持っている。

だから魔が伝染しにくいんだ。

人間はそそのかされやすいからね……すぐ伝染する。

「……多分、シエルも来るんじゃないかな。」

ファイがトーンを落とした声で言う。

シエル……。

その名を聞いたとき心がギュツとなるのを感じた。

「関係ないよ。たとえシエルが来ても。僕はただの観察者だ。」

ファイが優しく僕の頭を優しくなでる。

「おゆき、私の可愛い子。言って我が子らを見届けて来ておくれ……」

僕の周りが暖かな光で包まれる。

ファイ、君がどんなに愛していても、未来は変わらない。

だからファイ。

君がそんな顔をする必要なんてないんだ。

僕の願いは……

ファイ、君が悲しい笑顔で笑わなくなりますように……ただそれだけなんだよ。

第2話：デューイとギルの出会い

僕はいつも1人だった。

兄弟は沢山いるのに、誰も僕に近づこうとしない。
それどころか、顔を合わせるたび、すさまじい憎悪の目をむけてくる。

僕が生まれてまもなくした頃から、この国、ルージスタイン王国は荒れ始めた。

王の狂乱……

この国の王は1人の女に心を奪われ、狂ってしまった。

一日中後宮に引きこもって政にほとんど関わらなくなった。

王のいない事を良い事に貴族達はやりたい放題。

一部の貴族達による一党制政治が行われるようになった。

最初はその暴走も神殿の巫女が上手く納めてくれていたらしいんだけど、巫女の体調が崩れてからは、協会も廃退し、国は荒れていくばかりだった。

神に愛されし土地といわれ、長く栄華を誇ってきた国。

豊だった作物もなかなか実をつけなくなり、豊富だった資源も減り、人の心が枯れるように雨も降らなくなってしまった。

僕は城の中でも隔離された場所で育った。

それは、常に王位争いが絶えない城内で、側室だった母が王に出した条件だった。

母は僕の事を愛してくれていた。

しかし、それと同じくらいに他の兄弟達や側室、王妃からさえも憎まれていた。

父上に関しては一度も話した事がないくらいだ。

母とは王の寵愛が異常なせいでほとんど会う機会はなかったが、僕を愛していると何度も言ってくれた。

僕の母、マリーシエは王に人生を奪われた悲しい女性だった。

それでも、僕に会えた事で生きていて良かったと溢れる笑顔を見せてくれる優しい人だった。

「デューイ様、デューイ様!!」

下から女官の声が聞こえる。

「そこにいらっしゃるのは分かっているですよ。」

せーっかく木の上で気持ちよく昼寝してたのにさあ。

僕は大人しく木から下りた。

「どうしたの？アン。そんなにあわてて。」

ニコツと笑って答える。

「デューイ様、あなた様はお立場というものを理解しておいでですか？」

お一人で城内を歩いてはいけませんといつも申していますでしょう。

デューイ様に何かあつてはマリーシエ様がどんなに悲しむか……

・
」

アンの小言は長いんだよね。

1人になるなとか、立場とか……

そんなの、分かってるよ。

城の中では王位争いの真っ只中……

兄弟達は日々殺し合う。そして王妃にも命を狙われてる。

それゆえに1人で歩くのがどんなに危険かって。

でもさ、常に誰かに見られてるのって……本当息がつまるよ。

現在僕は王位継承第7位。

僕に王位が回ってくることなんてありえないけど・・・それでも継承権がある限りこの身が危険だって事は変わらない。

別に王位なんて望んでないのに・・・。

そして、アンがこんなにいるさく言うのにはもう1つ理由がある。

それは現王が側室マリーシェの事を以上なまでに愛している事・・・。

当然嫉妬の目は僕に向けられる。

そして僕が王位継承権7位にもかかわらず、王位を継ぐのではないかと言っ輩もいるくらい・・・

まあ、兄弟の中でも1人だけこの東塔に隔離されているってのもあるけどね。

「ごめんね、ただ・・・ちょっと生き抜きしただけなんだ。それより、アンの後ろにいるのは誰？」

初めて見る顔だし、さっきから気になってたんだよね・・・。

年は僕とあまりかわらなそうだから・・・8歳くらいかな。

アンは僕の心情を察してくれたのか、ため息を1つついだだけでそれ以上うるさくは言ってこなかった。

「この子は私の息子ですわ。今年で10になります。デューイ様より2つ上ですわね。ギルバート、挨拶なさい。」

「お初にお目にかかります。デューイ殿下。今日からデューイ様の従者としてお仕えさせていただきます、ギルバート・ネフューにございます。」

そう言って少年、ギルバートは勢いよく頭をさげてきた。

爽やかな風がさあつと吹く。

少しおどおどした瞳。

けどとても優しい瞳。

年近い者が誰もいなかった僕にとってはとっても嬉しかった。

「あはは、同い年かと思ったよ。よろしくね、ギルバート!!」

僕がそう言い、笑いかけると、ギルバートは安心したのか、天使のような優しい笑顔でニッコリと笑った。

ギルバートがきてからの毎日はとても楽しかった。

基本的にギルと一緒に悪ふざけをして遊ぶんだけどね。笑

俺の周りにはネフュー家の人間が結構いる。

ネフュー家は貴族としての立場はあまりないようだったけど、僕にとっては大切な家族だった。

東塔付きの侍女にも2人、ギルの姉達がいる。

レイチエルとローズ。

この2人は僕が5歳の頃から一緒にいるんだ。

アンの夫のネフュー子爵も忙しい公務の中、たまに顔を出しにきてくれた。

それに、なんと!!僕には妹がいたのだ。

マリーシュという名前の今年で1歳になるとても可愛い女の子。

城内が騒がしかったせいで公表できずにいたらしい。

今は神殿のある協会で育てられているとか・・・。

くわしい事は教えてもらえなかったけど、友達が出来た上に妹ができて嬉しい事続きだ。

マリーシェの娘だからマリーシュ・・・ややこしいけど、きっと母様に似て綺麗なんだろうな♪

それから3年後・・・僕はあの少女に出会った。

第3話：3年後

—— 3年後。

「今日はマリーシェ様も来られるようですよ。」

ギルが紅茶を入れながら嬉しそうに言ってきた。

そう、今日は僕の11歳の誕生日。

母様が東塔に来れるわずかな時間を僕は心待ちにしていた。

2年前、俺はやつと念願の妹との対面を果たした。

まだわずか2歳だった少女は、とても可愛らしくてそれでいて弱くて……

守ってあげたいと心から思った。

しかし、マリーシュが東塔で暮らしていくのは許されなかった。

マリーシュは城での話しを一切しない。

だから、俺もあえて聞かない。

俺はマリーシュが東塔に来た時に笑っていられる時間を作るだけだ。そんな事しかしてやれない……

「あんなことあったばかりですし、マリーシェ様もさぞ心配しているでしょうね。」

……そう、俺は先日、誘拐されかけたのだ。

隔離された東塔といえど安全とはかぎらない。

ここ3年の間に男兄弟は半分が死んだ。

13人いた子供達の中でこの国に残っているのは、兄が3人、姉が2人。俺とマリーシュ。

3人の兄が死に、1人の姉が死んだ。他の2人の姉は我先にと他国へ嫁いだ。

残る姉達も殺されるのがよほど嫌なのかもう他国へ嫁ぐ話しがきいている。

俺は王位継承第4位。……だいぶ出世したもんだ。

「母様は心配性だからね。それより、母様が来るまでに今日の分の課題やらなくちゃ。」

「なんだか、人事みたいですね。」

デューイ様、あの使用人とずいぶん仲良かったからもう少し落ち込んでいるかと思ったのに。」

「ギル……平穏な日常なんてある日突然壊れるもんだらう？」

だから俺は自分の身に何が起ころうと誰が裏切ようと……それを受け入れるだけだよ。」

そう……いつか俺は殺されるだらう。

この国は、日に日におかしくなっている。

ただ受け入れて、待つしかないんだ。

いつか終わる日を。

「……僕は何かあっても絶対デューイ様を裏切りはしません。」

ギルが真つ直ぐな目で俺を見てくる。

「俺は、絶対なんて信じない。ギルの事は大好きだし、信じているけど、それでも絶対なんてもの、この世にはないって思ってるから。」

そう、絶対なんてものありはしない。

ごめん、ギル。

「でも、1つくらいあっても良いと思いませんか？」

ギルがニコツと笑った。

ギルはいつもはおどおどしてて、俺より年上のくせにおつちよこちよいな所ある。

でも、こういう時はすごく大人な顔をするんだ。

俺は何も言えなかったけど・・・

でも、すごく嬉しかったんだ。

「デューイ兄様、もうすぐお母様が来る時間よ。」

沈黙を破るようにトコトコとマリーシュが歩いて来た。

「ちょっと待ってて、もう少しで終わるから。」

「兄様、こんなにいっぱいやったんだから、頑張ったんだからもう良いんじゃない？」

マリーシュが俺の前に詰まれた本の山を見ながら言ってきた。

「うん。でもね、頑張ってるなんて言えるうちはまだやれるって事なんだよ。」

マリーシュは不思議そうな納得いかないような顔をして首をかしげる。

ギルは苦笑いしながらこっちを見てくる。

「わからないよー。」

「あはは、マリーシュにはちょっと早かったかな。」

「デューイ様、マリーシュ様、マリーシェ様がお着きになられましたよ。」

侍女のその言葉にマリーシュの顔がパアッと輝き、走り出す。

俺も遅れて応接室に行くと、母様がマリーシュを抱いているところだった。

「デューイ!!」

母様がマリーシュを腕に抱いたまま突進してくる。

そして俺を腕の中に抱くと頬を嬉しそうにくっつけてきた。

大国の側室がやる事じゃないよな……。

でも、半年ぶりの母様はあいかわらず元気そうで少し安心したよ。

その後、アンに怒られたのは言うまでもない。

「デューイ、11歳の誕生日おめでとう。」

母様の笑顔はとても美しかった。

でも、なぜか今日は顔色がすぐれない……気のせいだろうか。

「母様、どうかなされましたか？」

「ああ、私の可愛いデューイ……陛下が、王が呼びなのです。」

……父上が？

今まで言葉らしい言葉すら交わした事のない人。

それは父である前にこの国の王である人。

どんな人が肖像画でしか見たことがなかったけど、会えると知って嬉しかった。

俺は身なりを整え、母様と城の中央棟へ向かった。

「僕も行かせてください。」

ギルが必死でそう言ってきたが断った。

「ギル、マリーシュ達を頼むよ。」

そう言うときギルはこくつと頷いた。

謁見の間。

長く続く赤い道の先にルージスタインの現王、アシラム・ルージスタインの姿があった。

王の玉座へと続く階段の5メートル手前で止まり、肩膝をつき、母様と並んでこの国の最敬礼の形をとる。

「デューイ・ルージスタイン、ただ今参上いたしました。」

緊張のせいか、空気が痛い。

握りしめられた手にはわずかばかりか汗がにじむ。

「表をあげよ。」

太い声が広間に響く。

顔を上げると、そこには王の姿があった。

「デューイ、お前も11歳になったのだな。」

「・・・はい。」

「お前の事はマリーからいつも聞いておったぞ。

11というのは成人の年。

本当は国中で祝ってやりたいところなんだがな、この国の情勢は知っておろう？」

たいした祝いの席も用意してやれぬ。すまんな。」

「いえ、そんな。もったいなきお言葉。その気持ちだけで十分です。父上。」

俺の事を少しでも気にかけていてくれた・・・
それだけで嬉しかった。

「ふっ・・・父上・・・か。」

「え？」

「いや、なんでもない。」

今日はそなたにプレゼントがある。」

王がそう言つと、近くにいた従者が俺の近くに来て、リボンが包まれた箱を渡した。

初めての、父からのプレゼント。

「あ、ありがとうございます！！」

ただ、単純に嬉しかった。

「開けてもよろしいですか？」

「いや、東塔に着いてから開けるがよい。」

「・・・？分かりました。」

「もう下がつてよいぞ。マリーシェ、そなたはここに残れ。」

「そ、そんな・・・王、今日はデューイの誕生日。」

一緒に祝う事を許してくださいださったではありませんか。

それに、ここから東棟までデューイに1人で帰れと申すのですか？」

母様は青い顔で王に意見している。

「母上、私も子供ではありません。」

こうして会う事を許され、祝いのお言葉をかけていただいた・・・
それだけで十分でございます。

東棟にも1人で帰れます。」

俺がニッコリ笑つと、母様は心配そうに俺の頬を撫でた。

「では、御前失礼いたします。」

そう一言残し、礼の形を取ると、俺は謁見の間を後にした。

その時見た、父上の不適な笑み・・・その訳を知るのはもうすこし後・・・

狂った時計は走り出す。

滅びの存在

東棟への帰り道、見知った顔があった。

「やあ、・・・君、デューイだね。」

護衛官を後ろに2人付け、俺の前に立ちはだかる。

白っぽい金髪の髪に水色の瞳。

確か、兄上達の中でこんな人がいたな。

まあ、生まれてから東棟に隔離されてたから、誰が誰なんだかサッパリだけど・・・

「お初にお目にかかります。兄上様・・・ですよね。」

失礼かとは思いますが、お名前を伺ってもよろしいですか？」

「俺の名前知らねーの？」

まあ、ムリもないか。東棟に隔離されたお姫様にはこっちの世界なんかおかまいなしだもんな。

俺はエバンヌ。王位継承権第2位だよ。」

明らかに敵意丸出しの目。

「つい、か、お前、護衛もつけねーでこのこ歩いてんじゃねーよ。」

何？自分は安全だとも思ってるわけ？ほんとお気楽者はいいいやない。」「

・・・さつきから嫌味ばかり。

そんなに憎いのか？そんなに俺が邪魔？そんなに王ってのはいいもんなのか？

そんなものになりたいがために兄弟で殺しあう・・・反吐がでるね。

「デューイ様つ。」

呼ばれて振り向くとそこには息を切らしたギルの姿があった。

「ギル!!!」

・・・どうしてここに。

「何1人で歩いているんですか。」

ギルは少し怒った様子で言ってきた。

「あはは、その従者の方がよっぽど分かってるみたいだね。」

「エバン又王子、失礼ですが急いでますので。」

そう言くとギルは俺の手を取って歩きはじめた。

「デューイ、勘違いしているようだから言っておくよ。」

兄上の声が後ろから聞こえる。

「お前は守られてるんじゃない。ただ、生かされていたただけだつてね。」

お前が生まれて、お前の妹が生まれてこの王はおかしくなったんだ。

皆お前達を憎んでる。

お前たちは・・・滅びの存在なんだよ。」

振り向いたとき、もうそこには誰もいなかった。

「ギル、どうしてここに？」

最後に聞いた、滅びの存在・・・その言葉が頭から離れない。

「デューイ様が1人で歩いて来るのが塔から見えたんです。」

「そーだったんだ。」

つたく、ギルの心配性はアン譲りだよな。

それにしても驚いたな、ギルが兄上の顔知ってるなんて。俺ですら知らなかったのに。」

「それは、従者としてデューイ様を守るためですから。

特にご兄弟に関しては母上からいろいろ教えてもらってましたし。

それにしても・・・先日誘拐未遂があつたばかりだったのに、のんきな・・・。」

ギルはため息をつきながら言ってきた。

「……大丈夫だよ。」

それに、俺に何かがあっても、たとえ死んでもこの国は何も変わったりしないさ。」

笑いながら俺は言う。

こんな事言ってはいけないって分かってる。

けど、さっきいた言葉がどうしても頭から離れなかった。

生かされていた？……誰に？

「……本気で言ってるんですか？」

「ギル？」

「本気でそんな事言ってんのかって聞いているんだよ!!」
肩をつかまれ、すごい剣幕で怒鳴られた。

「ご、ごめん。」

俺の言葉にハツとしたギルは肩から手はずしバツの悪そうな顔で謝罪してきた。

「い……いえ、こちらこそ取り乱したりしてすみませんでした。」

「いや……。」

「でも、デューイ様。何も変わらないなんて、死ぬとかそんな事もう2度と言ってはいけませんよ。」

ギルの目が真っ直ぐにデューイを見つめる。

「デューイ様、貴方は聡明なお方です。きっと今の世を変えてくださる。」

そう信じて皆……。」

ギルの声がくぐもった。

「ギル？」

「いえ、……まあ、早く帰りましょう。皆待ってますからね。」

「あ、ああ。」

ギルは笑っていたが、気まずい雰囲気の中、俺達は無言で東塔に向かった。

「それ、国王陛下からのプレゼントですか？」

ギルが何もなかったかのような笑顔で聞いてきた。

「ああ。」

「良かったですね。」

ギルが自分の事のように嬉しそうに笑った。

「あ、そうだ、デューイ様が陛下に呼ばれている間、皆でパーティーの用意をしてたんですよ。」

マリーシュ様が扉の脇でデューイ様を驚かすためにかまえていますから、ちゃんと驚いてくださいね。」

そう言ってギルはウインクをした。

おい・・・それ俺に言ったらダメだろ。

そう思ったがとりあえずうなずいておいた。

「じゃ、僕先に行ってデューイ様が帰ってきたって伝えに行きますから、合図したら入って来てください。」

そう言くとギルは鼻歌を歌いながら中に入って行った。

・・・マリーシュは母様が戻って来ないって知ったら悲しむだろうな。

でもきつと、笑うんだろうな。

エバン又兄様の口ぶりじゃ、中央でのマリーシュの扱いは手に取るように分かった。

王妃様が俺達の事毛嫌いしているのは前から知っていた。

先日の誘拐事件も王妃様の手の者だろう。

俺だって馬鹿じゃない。

そのくらい知ってるさ。

でも、だからって何が出来る？

たいした権力もない俺には何も出来やしない。

ただ、時が経つのを待つだけ……。
そう、兄様が言った通りなのかもしれない……。滅びの存在……。

いつか俺も滅びゆくのだ。

いつかは皆いなくなる。

最近、特に仲の良かった侍女、レイチエルとローズがそれぞれ姿を消した。

レイチエルとローズはアンの娘で俺が小さい時から侍女として側にいてくれた。

それなのに、別れもなしに突然いなくなってしまったのだ。

その前だつて、信賴していた護衛官の人達も故郷に帰ったとかでいなくなった。

別れくらい言っていけばいいのに……。

皆それぞれの用事で故郷に帰ってしまったらしい。

帰る家……。そこは暖かいのだろうか。

別れも言えず寂しく思う。

でも、俺は……。それを受け入れるしか出来ないから。

皆は故郷で幸せに暮らしているだろうか……。

少し感傷にふけり、空を見上げていたその時、塔の中からギルの悲鳴にも似た叫び声が響いた。

失われた命

「うわあああああああ————」

ギルの叫びが聞こえ、俺は急いで塔の中へ入って行く。

「うつ。」

嫌な臭い……

急いで皆がいるはずの広間へ向かう。

「ギル!!」

……。

俺は自分の目を疑った。

楽しいパーティーになるはずだったその場所は、一面に血の海が広がっていた。

真ん中には腹部から血をながしたアンと真っ青になり発狂するギルの姿。

どうして……？

！！

マリーシュ！！

「マリーシュ!!」

急いでマリーシュの姿を見渡すがどこにも見当たらない。

・・・ダメだ、落ち着け。

急いでギルの元へ駆け寄る。

「ギル!!ギル!!落ち着け。」

ギルは必死に母親を呼びかけ、体を揺さぶっていた。

「母様!!母様!!!!」

俺は取り乱したギルの頬を強く叩く。

「ギル!!しっかりしろ!!!ギルバート!!」

やっと俺の声が届いたのか、ギルが力なく俺の方を見た。

「あ・・・デューイ・・・さ、ま。母様が。」

「ギル、聞くんた。しっかりしろ。・・・ギルバート!!」

俺の声にギルは我を取り戻したのか瞳がゆれた。

「俺が・・・俺がここを離れたから・・・俺のせいで・・・」

バシ!!

もう1度強くギルの頬を叩いた。

「今はそんな事言っている場合じゃないだろう？」

とにかく、急いで救護班を呼んで来い。

俺は・・・父上の所へ行ってくる。父上は絶対何か知っている。」
最後に見た不敵な笑い・・・。
それが今になってやっと分かる。
あいつは何かを知っていた。

・・・ちくしょうつ。

「・・・分かりました。」

落ち着いたのか、ギルはすっかりした目で俺を見つめる。

「しかしデューイ様・・・ご自分の立場、見失わぬよう。」

俺が頷いたのを確認すると、ギルは急いで塔から出て行った。

「あ・・・デューイ・・・さ・・・ま。」

足元でアンの声が聞こえる。

振り返ると、アンが何かしゃべっていた。

「アン！！アン！！どうした、何があった！！？？マリーシュは？」

血だらけの床に膝をつき、アンに声をかける。

「何者かに・・・連れて行かれ・・・申し訳、ごさい、ま、せん。」

そうか・・・。

「・・・いや、いいんだ。それより、今ギルが救護班を呼びに行つた。もうすぐ来るから、しっかり気を持つんだ。」

こんな時、なんて声をかけたら良いのか分からないなんて・・・。
情けない気持ちでいっぱいになっていく。

「デューイ様・・・ご自分をお責めにならぬよう。」

あなた様、は・・・希望・・・な、ので、す。

この国、の王と、な、り、風と・・・なつて・・・。」

希望？・・・俺が？

こんな時にまで・・・。

こんな俺に希望を託すと言うのか？

どうして・・・俺なんか何も出来やしないのに。

だけど・・・まだ間に合うと言うのなら・・・

・

「分かったよアン。俺はアンが認めるに足る男になってみせよう。

アンが俺を希望と言うなら、俺は必ずこの国を変えてみせる。」

アンの手を握りながら誓った。

変えてみせるさ、今はまだ何も出来やしないけど・・・いつか必ず。

だから・・・

置いて行かないでくれ。

「その言葉・・・が、お聞きしたかった。」
アンの瞳から涙が流れる。

綺麗な・・・綺麗な涙だった。

「・・・これで、わた、しも・・・丘の上の・・・娘たちの元へ・・・」

アンの手が力なく横たわる。

「アン！アン！！」

アンの体温が少しずつ冷たくなっていくのが分かる。
どうして・・・

何故こんな事に・・・

俺はアンを体から離すと国王から貰った包みを片手に、謁見の間へ向かった。

黒い黒い闇が・・・俺を支配していく。

憎い、憎い・・・

ナニガ？ダレガ？

どこからか声が聞こえた気がした。

衛兵達は俺がここへ戻って来るのを知っていたのか、俺の血まみれの姿にギョっとしたが、何も言わず謁見の間へと通した。

「王！！」

そこには王の姿と・・・母上の姿。

王は俺の姿を見ても驚いた顔ひとつせず、むしろ俺がここに戻って来る事を知っていたような・・・
こうなる事を知っているかのような顔つきだった。

「デューイ！！どうしたの！！??」

母上は俺の姿を見て、驚くと叫びながら駆け寄ろうとした。
そこを王の護衛兵に止められる。

「王！！これはどういう事ですか？

デューイに何かしたのですか！！??話が・・・話が違っじやありませんか。」

王は何も答えない。

ただ顔にうつすらと笑みを浮かべて、俺を見つめていた。

「デューイ！！何があったの??」

「・・・・・・連れて行け。」

その一言で母様は護衛兵達に奥へと引きずられるように、連れて行かれてしまった。

デューイと呼ぶ叫び声だけが広間にこだました。

「デューイ、その箱を開けてみよ。」

王の言葉に、血まみれになってしまった箱に視線を移す。
中を開けると、そこには、銀色に光る短剣が入っていた。

王は驚く俺をさも面白いものでも見るかのようにクククと笑い
「わしはなあ、デューイ、おぬしが憎い。憎くて憎くてしたかない
のだよ。」

と、あざ笑うように言い放った。

その目は……………

ああ、なんで気づかなかったんだろう。

あの目は子を見る父親の目でもなければ一国の王の姿でもない。

「マリーシェの愛を受けるそなたと、あの小娘が……憎いのだよ。」

狂っていた。

「お前の存在がわしをおかしくさせたんだ。」

……目の前にいる、あいつは誰だ??

「ならば、俺を殺せばよかっただろう!!」

どうして…………

「そんなものつまらん。何の一興にもならぬではないか。」

あたも面白そうに言い捨てるあいつは、ダレ?

どうして今まで気づかなかった？

憎い……憎い……

‘平和な日常なんて、ある日突然壊れてしまうものだろう？’

そう言ったのは俺だったな……。

平和なんてものでもなかったけれど、それなりに楽しかった。

それは、俺が気づいていないだけで、もうとっくに壊れていたのに……

「デューイよ。最初で最後のプレゼントだ。

お前はその剣で誰を刺したい？

兄弟やわしを刺して玉座に座りたいかえ？？

何を求める？

その剣で刺してみよ。」

女に狂い、腐敗した愚かな王……

国が滅びかけているというのに、知らぬふり。

まあ、それは俺も同じだったな。

しかしこれが父だとは……

何もかも滑稽に思えて、笑いさえこみ上げてくる。

「ククク・・・・・・・・」

滅び行く存在・・・・か。

「俺が・・・・私が一番憎いのは・・・・。」

そう、俺が一番憎いのは。

「何も出来ないと嘆くばかりで、何もしようとせず、大切な者も何一つ守れない自分自身ですよ・・・・王。」

俺は、自分自身が一番憎い。

「俺は何も見えていなかった。」

あんたも・・・・周りの事も・・・・

何も見ようとしなかった。

そんな目など、・・・・いらない。

俺は自分自身の左目を・・・・切り付けた。

自分自身の叫び声が聞こえる。

王のなにか叫ぶ声が聞こえたが、何て言っているのかは理解出来なかった。

それから俺は……

どうやってここまで来たのかは分からない。

ただ、ここに来なきゃいけないと思った。

アンが最後に言っていた、‘丘の上’、それはおそらく、この国が一望出来る、東塔から続くこの丘だろう。

以前ここに来ようとしたとき、アンにきつくしかられた覚えがある。俺が2、3歳くらいの頃はよくアンに連れて来てもらっていたのに、何で駄目なんだろうって不思議だった。

アンはこの丘が大好きだった。

そして、この国が好きだとアンは言った。

昔はもつと豊で、資源も豊富で皆の笑顔が溢れる国だったと言う。

日々命を狙われる俺には安らぎなんてなくて、この世界が好きとはお世辞にも言えなかったけど。

アンの言うそんな国があったならば、行ってみたいと思ったものだった。

少女と王子の誓い

そよそよと心地よい風の吹く丘の上、気がつけば空は暗くなり、月明かりだけがやけに眩しく輝いていた。

デューイは意識が朦朧とする中、必死で足を動かし、丘を登ってきた。

頭が重い……。思ったより血が流れすぎたようだ。血が止まらない。

丘の上には……。小さな墓石があった。

……。墓？

以前来た頃、こんなものがあっただろうか。

それは墓というより、何かの記念碑のようだった。

石の前まで行き、月明かりだけを頼りに刻まれた文字を読み上げていく。

「ジェイ・カルオス

ヘイネス・ヴィンセント

レイチェル・ネイシス……。ギルの姉だ……。

ウィリアム・スピリゲン

ローズ・ネイシス……

ハリー・ヴィンセント……。」

皆知った名前ばかりだった。

ある日いなくなった、俺に笑顔を向けてくれていた人達……。

今も同じ空を見上げて、故郷で幸せに暮らしていると思っていた人達。

．．．．なぜ？

頭がついていかず、自分に問いかける。

それでも、なにかが溢れ出す想いがあった。

．．．．どうして．．．．．

『それはおぬしが一番よく分かっているのではないのか？』

頭のなかに声が響いた。

「っ。誰っ？？」

とつさに後ろを振り向くと、そこには1人の．．．．．美しい少女の姿があった。

漆黒の髪に緑の瞳．．．異形と呼ばれるその姿、色。

ルージスタイン王国では、昔より黒と緑は災いをもたらす色とされ、嫌われている色だった。

しかし実際、そんな色を持つ人間などルージスタイン王国には存在していなかったし、ましてや隔離されて育ったデューイにとっては初めて見る者だった。

だけど、今は、それがこの世で一番美しいものに思えた。

「キミ、死ぬの??」

沈黙を破ったのは少女だった。

見つめていたら吸い込まそうな緑の瞳。

この世のすべてを見透かしているようなそんな瞳。

滑らかな白い肌、整った顔立ち。

可愛らしくもあり、それであって美しい。

ゾクッ。

デューイの背中になにか冷たいものがはしった。

目が……そらせない。

「……まだ、死ねない。」

そう言うのが精一杯だった。

何でこんなに緊張してるんだ?

「ふーん。でも、そのままだったら確実に、死ぬね。」

少女はさも何でもないといった感じでたんと言い放つ。

それはデューイ自身もなんとなく感じていた……。

目元からしたたり落ちる血が、止まらないのだ。

けれど、自分はまだ死ねない。

今まではただ死を待ち、すべて受け入れる事が自分の役割だと思っていた。

というより、それしか出来ないのだと思っていた。

所詮自分も籠の中の鳥。

せめて兄達のように殺しあう事はせず、ただ殺されるのを待てばいい。

それまでは、母やアン達の認める王子であろう。

そのために勉強は欠かさず毎日やっていた。

だけど、今は……

今ここで自分が死ぬ事は許されない。

意識が無くなりそうなのを精一杯こらえながらもなぜかそう思った。

どうして？

「その墓石の人達……キミのせいで死んだんだよね。」
クスクスと笑いながら少女は答える。

……言うな……

「可哀相に、暗殺された手前、本来の家族の墓には入れずに、こんな所に埋められてしまっなんてさ。」

ああ……。

……本当はこの墓石を見た瞬間気づいていた。

ずっと抱えてきた疑問が、この墓石を見た瞬間、なぜだか分からないけど・・・確信に変わったんだ。

俺がここに来てはいけなかった理由。

いつ死んでも良いと弱音を吐いてしまったとき、ギルがあんなに怒った理由。

いなくなった人達の事をアンに聞いたとき泣きそうな顔で笑い、決まってこう言ったものだった。

「訳あって故郷に帰りました。

最後にきちんとした挨拶もなしに申し訳ございません。・・・と。

デューイ様が新しい未来を築いて下さる事を願ってますと言っておりましたよ・・・。」・・・と。

そういえば、だいたいなくなる前にその人達は俺の頭をなでて言うんだっとな。

大きくなられた・・・と。

私は幸せです・・・と。

その者達は自分の死期を悟っていたのだろうか・・・？

俺なんか、気づきもしなかったのに。

俺は・・・最低じゃないか。

「・・・俺は・・・愚かだった。

何も出来ないんじゃない。何もしようとしなかったただけなんだ。見て・・・見ぬふりをしていたのかもしれない。

・・・でも、俺は生かされた。だからまだ死ねない。」

なんでこんな事こいつに言ってるんだろ。

本当に幸せだったか？

もう、そんな言葉さえ届かない所へ行ってしまったんだな。

「助けてあげよっか？」

少女はニッコリ笑う。

・・・は？

何言ってるんだコイツ・・・。

その瞬間、目の前がクラリと揺れた。

咄嗟に墓石に手を突き、膝を地につける。

左目から血が流れ、墓石にしたたり落ちる。

「ねえ、さっきからキミは・・・どうして泣いているの？」

少女の言葉にハツとした。

左目からは赤い血が涙のように流れ、右目からは透明な雫が・・・
あとからあとから流れ出ていた。

「悲しいの？ 苦しいの？ じゃあ、僕が一思いに殺してあげようか？
一番楽に死なせてあげるよ。」

少女はニッコリ笑いながら言う。

助けるって言うてみたり、殺すって言うてみたり・・・わけわかんねえよ。

「まあ、いつか。どうせこの国滅びるんだし。人も街もなにもかも……闇に変わるのだしね。」

「そんな事ない!!」

気がつくと呼んでいた。

「そんな事させない!!」

泣きながら……叫んでいた。

「キミは弱いよ。そんなキミに何が出来たの？多くの犠牲の上に立つだけの価値が、キミにはあるの？」

少女はあざ笑うかのように俺の核心をついてくる。

「俺は……」

言葉につまりもう一度墓石を見る。

俺の血で汚してしまったな。

ああ……本当に何も見えていなかった。

彼らのおかげで今自分はここに存在している。それは確かだ。

でも、もう「ありがとう」も「ごめんなさい」も言えないんだ。

もう届かないのかな……。

そう思うととてつもなくなんとも言えない感情がわき上がり、後悔ともいえぬ想いが雫となって次から次へとしたり落ちた。

暗殺者の手から、俺を守るために命を張ってくれた者達……。その者たち出来る事……。

アンの最後を思い浮かべる。

「俺は・・・俺が、犠牲の上に生きる資格があるかなんてのは、そんなの分らない。

でも・・・、この者達は俺を認めてくれた、確かにあつた想いを託してくれたんだ。

だから、俺は、その想いを信じる。

この者達が誇れるよう、皆が認めるに足る王になってみせる！！
デュージェイエル・ユノ・オルセン・ルージスタイン・・・」

俺の真名・・・。

「この名と我が血をもって彼らと・・・そしてキミに誓おう。」

・・・もう、泣かない。

これで最後だ。

「だから・・・まだ死ねないんだ。」

視界が揺れる。

最後に見た景色は・・・満点の星空に大きな月。

そして、少女の美しい顔・・・だった。

シエルとリアラ

リアラは咄嗟にとつてしまった自分の行動を思い出し、ため息をついた。

この国の王子、デューイに起こっていた事は一部始終見ていた。最初は、どこでこのアホ王子が潰れるのかと、ただ退屈しのぎに観察していただけだったのに……。

あの国王は魔に食われ、もうレベル4になりかけている。もう終わりだなと思っていた矢先、こいつが現れた。

血にまみれたデューイはとても暗く深い闇を心にやどしていた。

しかし、こいつの心は、そんな闇を抱えてなお、魔が巣すら作っていなかった。

こんなにも憎しみでいっぱいのはずなのに……

憎しみは膨れ上がり、しかし、負けてたまるかと言わんばかりに、こやつは、自分の瞳を刺したのだ。

自分の体を自ら傷つけるなど、なんと愚かな行為だと思ったが、リアラはデューイに興味がわいた。

あんなに深い闇なのに、レベル0だなんて……。

普通の間ではまずありえない事だ。

膝の上で苦しそうに息をする少年をまじまじと見る。

綺麗な蜜色の柔らかな髪。

整った顔立ち。

そして人を惹きつける深い青色をした瞳。

今は閉じていて見ることは出来ないけれど……

あの強い瞳には心惹かれるなにかがあった。

……墓石の前で誓った言葉と流した涙……。

そこには、折れない強い強い意志と決意。

そして、思わず見入ってしまったいそうになるくらい綺麗な涙があった。

ふっ、おもしろい……

こやつという未来とやら、少し見物してみるのもいいかな。

もしも魔に飲み込まれるようであつたら……その時は僕が始末するけどね。

リアラは、生暖かい血が顔に付くのも気にする事なく、デューイの傷ついた瞳に口付けを落とした。

そして、手をかざす。

ポウッと淡い光がデューイを包みこむ。

流れつづけていた血が止まり、傷がみるみるうちに塞がっていく。

デューイの呼吸も安定したのを確認すると、手をかざすのをやめた。

「シエル、出てきたら？」

リアラが少し怒ったような口調で言うと、森の奥から1人の年若い

男が出てきた。

シエルと呼ばれたその少年は、おそろしく綺麗に整った顔立ちで、切れ長の大きな瞳は深い海の色をしていた。

リアラと同じで、見つめたら吸い込まれそうなくらい美しくて、それでいてどこか悲しさを感じさせる瞳だった。

容貌は15・6歳くらいのまだあどけなさが残る少年だったが、少年からかもし出される空気は到底少年のものとは思えないほど鋭く、深い闇で満ちていた。

肌は適度に日焼けしている小麦色。

その肌は小麦色はしているが、リアラのように滑らかで、とても綺麗な肌だった。

髪・・・前より少し伸びたかな。

ふとそんな事を考えてしまう。

耳にかかるくらい伸びたその髪は、月明かりに反射して、まるで金色の絹糸を繋ぎ合わせたかのようにキラキラと光っていた。

触ればとてもやわらかであろうと思わせる金の髪をサラサラとなびかせ、少年はリアラの前に姿を現した。

「8千年ぶり・・・かな。」

そう言っただけ少年は、愛おしい者を見るかのように優しい笑顔で笑うのであった。

リアラは胸がチクンとなるのを感じた。

なんだかんだ言っても、ずっと会いたかった存在。

こんな形で再会するとは思ってもいなかったけど・・・

少年・・・・・・・・シエルの笑顔に瞳が揺れた。

「やっぱり。いると思った・・・・・・・・。」

ファイがね、シエルは絶対ここに来るって言うてたから・・・・・・・・
久しぶりだね、シエル。」

思わず顔が緩んでしまう。

やっぱり自分はシエルには甘いのだな・・・・・・・・と自嘲して、
気を取り直し一番聞きたかった事を聞く。

「今回の事・・・・・・・・この国の事・・・・・・・・全部ルシュファール様が
仕組んだ事？」

ルシュファール・・・・・・・・ファイと対になる初まりの存在。

この世界の母であり、父であるお方。

しかし、自らを心の闇と化してしまわれた可哀相なお方。

「違うよ。」

リアラの質問にシエルはきっぱりと否定した。

「あの方は・・・・・・・・ファイ様同様何もしない。何も出来ない・・・・・・・・。」

ただ、待っているだけ。滅び行くのを・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・そうだね。」

でも、始まりの地がここまでひどいのはどういう事？

明らかに異常よ。」

「それは人間の愚かさゆえ・・・・・・・・それがたとえ始まりの地であつても仕方のない事なんじゃない？」

シエルはニツコリ笑って答える。

「そうね・・・・・・・・でも、この魔達はまだそんなに強くもないくせに、‘智’を持っていたわ。」

明らかに知恵を与えた者がいる・・・・・・・・。

でなきゃいくら人間が愚かでも、始まりの地が10年やそこらでこんなに魔で溢れるなんてありえないもの。」

キツとシエルを睨む。

「やーっぱりリアラに隠し事は出来ないね。」

シエルは苦笑いをしながら降参と言わんばかりに白状した。
元より、隠すつもりもなかったくせに……。

「ま、確かに。ちょーっと入れ知恵したのは俺だよ。」

でも……さ、すぐそのかれたのはここの王だよ?」

やっぱり……

思わずため息がもれる。

「でも、会えてほんと嬉しいよ。リーちゃん♪」

それだけでも、ここに来たかいたったってもんだね。」

シエルは本当に嬉しそうにニツコリ笑う。

「もう……。僕に手間かけさせるのは止めてくれないかな。」

「あははは。けどさ、人間嫌いのリーちゃんがこいつを助けるなんて……。以外だったよー?」

笑いながらもシエルの目つきが鋭くなる。

「今デューイに手を出したら許さないからね。」

僕はこれでもデューイの事は気に入ってるんだ。だから助けた。」

リアラの言葉にシエルは面白くなさそうにへえ……。とだけ答える。

「……。気に入ってるってよりは興味をもったってのが正しいかもしれないけど……。」

まあ、僕はただの観察者でしかないんだけどね。

今デューイに死なれたら、観察する価値もなくなっちゃうし……。
」

見届ける。

それが僕の役目だ。

「そ?まあ、安心してよ。俺だってリーちゃんの邪魔をしに来たわ

けじゃない。

ただ、ゲームをしにきたんだよ。」

リアラの眉がピクッと動く。

「また？」

「そ。この始まりの地で魔と人間がどれだけ頑張るか……。

俺はその最初のほんの些細な火種にすぎない。

ゲームを動かすのは人間だよ。どんな結果になっても構わないしね。」

シエルが無邪気な笑顔を向けてくる。

その笑顔が昔は好きだった……。だけど、今は……。少し、怖い。

「ルシファアユ様を悪く言う気はないけどさあ、あんまりファイの事追い詰めないでほしいなあ……。」

リアラは困った顔で言う。

ゲームに関してはさほども驚いた顔はしていない。

「相変わらず……。だね。」

シエルは少し寂しそうな顔で笑う。

昔から時おり見せるシエルのその表情の意味をリアラは理解出来な
いでいた……。

ただ……。その笑顔を見せられると、胸がギュッと切なくなる。

何も出来ないでいるのは僕も同じかもしれないね。

さつきまで、何も出来なかったと嘆いていた膝の上に眠る少年を横
目にリアラも思った。

「ま、俺はリーちゃんに会えて満足だし、この国をどーこーする気
はないから。

それに……。」

ニヤツと不適な笑みをうかべながらシエルは言う。

「俺も興味がある人間がいるしね。」

人の近づく気配を感じたのかファイの姿が少しずつ遠ざかって行く。

「それじゃ、またね。リーちゃん」

ひらひらと手を振りながらシエルは姿を消した。

「まったく……いつも勝手なんだから……」

でも、迎えが来たみたいだしね……僕も行くよ。」

少年の顔を見ながらつぶやく。

「……デュージエイエル・ユノ・オルセン・ルージスタイン……か。」

それはこの国にあった古い言葉で、闇と光を意味する言葉だった。

「ま、せいぜい頑張つて。」

そう言つてデューイの赤と透明な涙を指でふき取ると、リアラもまた闇に姿を消した。

第4話：5年後

——あれから5年。

リアラは中民区と貧困区の境目に小さな古い店を出していた。

あれから少しずつではあるが、着々と魔は国中に広がっている。

現在のルージスタイン国の民達は大きく3つの区によって住む場所を分けられていた。

一部の裕福な上流階級の貴族達が住まう貴族区。

没落した貴族やまだどこにか生活を保つだけの金銭的余裕がある平民達が住まう中民区、そして、荒れ果てて家を失った浮浪者や捨てられた子供達がゴロゴロとさまよう貧困区。

雨はほとんど降らず、田畑は枯れ、行き場を失った人達が溢れていた。

それと共に魔は溢れ、夜な夜な響く誰かの叫び声。

その声は時には若い女の声であったり、太い男の声、子供の声と様々ではあったが、耐える事なく毎晩続いていた。

「リアラ様」。新しく作ったウルムシカの薬と栄養剤、棚に並べておきました。」

「ありがとう。そろそろお茶にしようかマリー。」

幼い少女の声と若い女性の声が店の中に響く。

そこには成長し、15・6歳年頃の少女の姿となったりリアラと、行方不明になったはずの今生きていれば9歳になるマリーシュの姿があった。

自分の中の設定では16歳となっているけど、他から見ればリアラの容貌は少し幼く見えるだろう。

しかし、リアラにとってはその姿でさえ不便でしかないのだ。人間の姿になっているから成長せざるえなかったのだが、月の日（生理）は体調がすぐれないし、胸はわずかばかりだが膨らむしで不便極まりないのだ。

この子を拾って、5年……か。

隣でせつせと紅茶を入れている少女に目をやり、ふと思う。

自分が子供を育てる事になるなど、思いもよらなかった。

天界で、兄弟達の面倒は見てきたけれど、人間の子供とは全然違う。あの日はどうかしてたのかもしれない。

デューイの前から姿を消した後、リアラは元々用意していたこの建物の前まで来ていた。

すると入り口の脇で数人の子供達がなにかを言い合っていた。

そしてその中の1人がリアラの姿を見つけると、「魔女だー」とか失礼極まりない事を叫んで、うずくまっている少女を置いて我先にと逃げて行ってしまったのだ。

まあ、その時のリアラは黒いフードの付いたケープを被っていたし、瞳は緑だし……

そう思われるのも無理はないのだが。

あんなに勢い良く逃げる事もないんじゃないかと言いたくなる。

足元に横たわる少女はどこから誘拐されたのだろうか、素材の良いドレスを着ていた。

ただ、さっきの子供達にやられたのだろうか、装飾品はみな引きちぎられ、服も髪も顔もみなボロボロだった。

貧困区からここまで逃げてきたのだろう・・・
靴の履いていない足は、擦り切れて血が滲んでいた。

まったく迷惑な・・・

いくら人間とはいえ、これから出す予定の自分の店の前で死なれては気分が悪い。

どうしたものかと考えていたら、少女が意識を取り戻したのか、うめき声を上げた。

「う・・・あ・・・。」

苦しそうにもがきながら立ち上がろうとする。

その姿がなんだか見ていられなくて、リアラは立ち上がろうとする少女に手を差し伸べた。

リアラの手を借りて立ち上がった少女と目が合う。

月明かりのおかげか、少女の顔がはっきりと見えた。

少女の瞳は・・・綺麗で深い空の青だった。

そして、その瞳はどこか先ほど会った少年を思わせた。

少女はリアラを見つめると、薄く開いた瞳からボロボロと涙を流し始めた。

いきなりの事にギョツとする。

少女はニツコリと笑い、ポロポロ涙を流しながら始めたのだ。

そして、「きれい、な、天使、さま。」と、片言だけではっきりと少女は言ったのだ。

溢れる笑顔で・・・天使さま・・・と。

そうして笑いながら涙を流し、プツツと糸が切れたように少女は意識を手放した。

リアラは何を思ったのか、少女を抱え、建物の中に連れて帰った。

幸い、薬剤店を開く予定だったので介護に必要なものは皆そろっていた。

リアラは少しばかりの回復術を施すと、体を清潔な水で拭き、薬を塗って包帯を巻いてあげた。

すべてが終わった後、綺麗になった少女の姿を珍しい生き物でも見るかのようにまじまじと見つめた。

・・・今日はおもしろい人間に2度もあったな。

1人はこの国の王子、デューイ。

そしてもう1人、デューイの妹の・・・確かマリーシュとか言ってたっけ。

さつきはボロボロすぎて気づかなかったけど・・・。

誘拐されて貧民区に捨てられたか、売られたかして、どうにかしてここまで逃げてきたんだろう。

わずか4歳の、しかも王宮育ちの姫がこの貧民区でなんか生きていけるわけがない。

そしてマリーシュもデューイ同様レベル0だったのだ。

しかし、マリーシュの場合は、闇がない。

闇がなければ魔の住み着く巢も作れはしない・・・。

そして、もっと驚いたのが、マリーシュにはわずかだが神秘の力がある。

それは、他の闇を吸収し、己の中で浄化させる能力。

そういえば、始まりの地では代々その力を持つ者が聖女として神殿に使い、長きにわたってこの地を収めていたとか……たしか今の巫女はフィリアルシア・エヴァ・オルセンとかってファイが言ってたような……。

その力がこの少女にもあつたのか……だから僕の事を天使だとかって言ったんだな。

リアラが天使かどうかは別として、リアラが他の存在だという事に気づいたのだろう。

デューイを助けた事もあって、神気が少し出ていたのもあるかもしれないが、今は人間の姿、構造を保っている。その状態のリアラを別の存在だと気づいたこの少女……。

まあ、鋭い人間はリアラが少し他とは違うって気づく人はいるけど……

髪や目とかの容貌のせいで、魔女とか悪魔とか、そういう類のモノと思われてきたのだ。

天使……か。

まあ、天からの使いだから天使。

あらがち間違いではないんだけどねえ……。

目を覚ましたマリーシェは何も覚えていなかった。

リアラの手が差し伸べられる以前の記憶がスッポリ抜けていたのだ。

マリーシェの歩いてきた道を思い、リアラは少し悲しくなった。

僕は、同情しているのだろうか……？

でも、それでも、闇を一切持たない少女の光はとても儚くて、一見強そうに見えてそれはとても弱いものだった。

闇を持たないんじゃないかって持てないのだ。

きつと、あまりの大きな闇がこの少女にふりかかり、一つでも少女の中に入り込む事があれば、きつと少女は壊れてしまうだろう。

今回の記憶喪失は、ただの自己防衛にすぎない。

目の前で繰り広げられる殺戮……

おびただしく降り続ける血の雨。

ついさっきまでは兄の誕生会をやるんだと笑いあっていたハズなのに。

4歳の少女が受け止めるには重すぎた現実だったのだろう。

気まぐれだったのか同情だったのかは分からない。

でも、僕は、マリーシュにマリーという名を与え、側に置いておく事にした。

ギルになったシエル

カランカラン。

木製の扉が開く。

マリーには店に人が来たときは極力店のほうには顔を出さずに裏の仕事をさせている。

リアラは黒いケープを被って客を出迎えた。

「やつほー。元気してる？」

そこには、短めのこげ茶色の髪、それと同じ茶色の目をした、品の良さそうな青年が立っていた。

「なんだ、シエルか。」

リアラはその青年をシエルと呼んだ。

「どう？王位継承権第一位デューイ王太子の側近ぶりは……。」

「仕事は仕事で頑張ってるよー。」

でもさ、デューイって手を抜くっての知らないから嫌になるよ。」

「シエルは手を抜きすぎなんだと僕は思っただけだね。」

「そんな事ないよ。『ギル』として俺なりに頑張ってるつもりだよ？」

だから、また遊びに来てよ。ムー。」

そう、目の前の青年の体はシエルの本体ではない。

シエルはデューイの側近だったギルバートの心に入り込んでいるのだ。

そしてリアラも「ムー」という名の黒猫になってたまに城の様子を見に行っているのだ。

「前から思ってたんだけど、シエルのやりたい事っていったいなんなのかサッパリ分からないんだよね。」

「なんでわざわざ人間に手を貸して側近にまでなってるの？」

「デューイの事嫌いだったんじゃないの？」

「別に嫌いではないよ？」

「でも味方ではないかもね。俺はギルに興味が沸いた……ただ、それだけだよ。」

「リーちゃんこそ、人間の子供を育てるなんて、俺にはそっちの方が驚きだったよ。」

「そんなの僕の勝手だろう？」

「あはは。でも分かるよ。もう少し大きくなったらきつと見違えるほど美人になると思うしね。」

「そしたら夜の相手にでも……ぶっ」

リアラがシエルの頭を叩く。

「シエルと一緒にしないでくれるかな。」

あと、マリーに手出したらいくらシエルでも許さないよ?」

リアラの顔は笑っているけど、目が笑っていない……。

「き、肝に銘じておきます。」

「……ま、仕事の方も、ほどほどにしておきなよ?」

「何?俺の事心配してくれてんの?」

シエルがニヤニヤ笑いながらリアラに近づいてくる。

「そ、そんなんじゃない?」

「まあ、でもそろそろ沈黙の時間も終わりだし。」

シエルは意味ありげにニツコリ笑う。

「???それって……どおゆう……」

「それより！！せっかくリアラが好きな木苺ミルク持ってきてあげたのに、暗い話しばっかりじゃつまらないよー。」

リアラが質問を返す間もなく話しを変えられ、上手く話しをごまかされた様ではあるが、木苺ミルクと聞いてリアラの表情は一変した。

「シエル大好き！！さあ、椅子に座っても良いよ。」

極上の微笑みでリアラが笑う。

「うわ、何その変わりよう。けどやっぱり上から目線なんだ。」

「そんな事ないよ？」

クスクス笑いながらもテーブルを片付ける。

だって木苺ミルク大好きなんだもん。

地上にもこんなに美味しいものがあつたなんて、そこだけはシエルに感謝しなくちゃ。

シエルはここに来る時、たまにお土産として木苺ミルクを持ってくる。

今この国では木苺とミルク、特にミルクなんかは滅多に手に入らない貴重品だ。

「じゃあ、ご褒美に愛のキスを……………」

「マリー。シエルが来たよー。」

シエルを無視して奥にいるマリーを呼んだ。

「ひ、ひどい。」

「シエル様。」

マリーがドタドタと走って来る。

「シエル様！！いらっしやい。」

「おお、マリー！！」

抱きついてきたマリーをシエルが迎える。

「俺が待ってたのはこういう歓迎なんだよ。なのにリーちゃんときたら……………」

「何か言った？」

「…………いえ。…………マリー。お願いだからあんな風に育つんじゃないぞ?」

シエルがぼそぼそとマリーに何か吹き込んでいる。

「シエル。僕に聞こえてないとも思ってるの?」
まったく。

「シエル様はリアラ様が大好きでちよつかい出したくてしかたがないですよね。」

ニコニコしながらマリーが言ってきた。

「そうなんだよ。」

俺の愛はいつになったらリーちゃんの心に伝わるのかなあ。

もう結婚して1億年は経ったというのに、夫婦の愛は一向に深まらないし……………」

「なっ。そんなのもうとづくに終わってるじゃんか!!」

「2人って結婚してたんですか!!??」

マリーがビククリした瞳でこっちを見てくる。

「ほら、マリーが勘違いしちゃうじゃないか。」

「いいじゃんか、本当の事だし。」

そう言いながら頬にキスをしてくる。

「はあ…………じゃあ、今すぐ全世界の妻っていう存在達と手を切ってきて。」

リアラがついに反撃に出た。

「う…………つ…………妻はリーちゃんだけだ、よ?」

「じゃあ、愛人は? 恋人は? 僕以外の存在と一切の関係を持たないって誓える?」

シエルは、色恋が絶えない男だ。

「……………」

「マリー。分かった? シエルってこういう奴なんだよ。」

マリーも気をつけなきゃだめだよ。シエルだけじゃない、人間の男っていう生物はたまに凶暴化するから。」

「……………そうですね。」

シエル様が一夫多妻制を主張する人だったなんて思ってもみませんでした。

でもマリーにはリアラ様がいるから良いんです。」

可愛い事言ってくれるな♪

「そっか、じゃあ、マリーの事は僕が守ってあげるね。」

マリーの顔がパアッと輝く。

「ああマリー、マリーに俺は嫌われてしまったのかい？」

「いいえ、嫌いになんかなりませんよ。シエル様は……マリー

ーにとって大好きなお友達ですもの。」

「あはは、お友達か。それじゃあシエルも手を出せないね。」

シエルはお友達とハッキリ言われてしまい、嬉しいんだかどうかなんだけ複雑な顔で笑っていた。

こうやって3人でしゃべっていると、遠い昔を思い出す。

まだシエルもルシファーク様も天界にいて、皆で笑いあっていた時[□]
代……。

もう戻らない時を思い返しながら、大きくなったマリーを見つめ、優しく頭を撫でるのであった。

マリーの光

深夜、貧困区から様々な叫び声が聞こえてくる時間、マリーはゴソゴソと何か準備をしていた。

「マリー、また今日も行くの？」

リアラはシエルからもらった木苺ミルクを火で温めながら、何やら準備をしているマリーを見つめる。

「はい、だって皆困ってるんですもん。」

ここ数ヶ月まったく雨が降っていませんし、放ってなんておけません。」

マリーはニツコリと笑いながら作業を続ける。

マリーは、ほとんど毎日のように貧困区へ出かけては浮浪者の集まる建物や捨てられてしまった子供達に水とわずかばかりだが食べ物なんかを与えている。

ここにある水はリアラが水の精霊に頼んで持ってきてもらっているので尽きる事はない。

それにこの水とリアラが調合してある薬には神気が含まれている。それゆえ、多少ではあるが、魔を沈静させる事が出来るのだ。

「・・・仕方ないな。今日はこれも持って行っていいよ。」

そう言つてリアラは重い袋をマリーに渡した。

「いいんですか？それもこんなに。」

袋の中には沢山の銀貨や銅貨が入っていた。

それはこの国のお金だ。

リアラの作る薬はとても良く効くと貴族達に評判で、結構良い値段で売れる。

リアラは普段髪をフードに隠し、薄い紫色の眼鏡をかけて店番しているので怪しまれはするものの、異形の色だとはバレていない。

「銀や銅なんかの固まりに僕は何の興味ないからね。最低限の物があれば生きていけるし……。」

「リアラ様……。」

「言っておくけど別に人間達のためにやってるんじゃないからね。」

僕はその固まりなんかいらなからマリーにあげるんだ。マリーが自分の物をどうしようとマリーの勝手だから、僕は何も言わないだけさ。」

温かくなつた木苺ミルクを飲みながらリアラは言った。

「リアラ様は優しいです。」

「……僕が？何で？」

僕なんか人間達から見たら悪ってゆう存在なんじゃないかな。」

人間が生きようが死のうが何とも思わない。

ファイの頼みだからこの国には来たものの、実際この国が魔に飲まれようとリアラにとってはどうでもいい事ないのだ。

たとえ道端で人が死にそうになつていようと、リアラは気にしない。薬代も決して安い値段では売っていない。

硬貨には興味はなかったが、だからと言って慈善事業をする気はまったくなかった。

病気で苦しんでいる人達は大勢いて、たまに薬を求めにお金を持たない人達がやってくる。

しかしそんな人達をリアラは冷たい瞳で見すえ、手を差し伸べる事もなく追い返すのであった。

まあ、マリーが追い返された人達のリストを作つて、出来る限りの家を回り、薬をコツソリ届けたりしているんだけど……でも、それはマリーがやっている事。

だからリアラには優しいと言われる意味が分からなかった。

そんなリアラを見ながらマリーはクスッと笑つて言う。

「それでも、私にとってリアラ様はリアラ様です。」

あの時差し伸べてくれた手が私にとっての光で、この世の何よりも暖かで優しい存在でした。」

「そんなの、ただの気まぐれだよ。」

そう・・・ただの気まぐれ。

ここに置いたのだってちよつと興味が沸いただけだったし・・・でも、今はマリーを拾って良かったと思っっている。

マリーは暖かくて無邪気で、穢れを知らないそのままの笑顔を向けてくれる。

そんな笑顔がリアラは好きだった。

拾って1年くらいたったとき、リアラはマリーに自分は人間ではないと教えた。

もともとマリーも気づいてはいたから、たいして驚く事はなかったが・・・

気の遠くなるほどの長い年月を生きているという事を話したときは少しびっくりしていた。

それでも、精霊や深海の事なんかを話すと、いつも目を輝かせながら嬉しそうに聞いていた。

ただ、リアラの口から人間の話しをする事はなかったが・・・。シエルは自分と似た存在、そして友人だと話しておいた。

リアラはマリーに記憶を失う以前の事も話した。

この国の王女である事、デューイという兄がいる事、何者かによって誘拐され貧困区に来るはめになった事。

マリーは賢い子だった。

最初は戸惑っていたものの、リアラの話しを理解した。

それでも自分の居場所はここだと、ここに置いてほしいと言ったのだ。

「準備が出来たら行こうか。」

リアラは黒いケープをはおり、フードを被りながら言った。

貧困区はとても危険な場所だ。マリー1人を歩かせるわけにはいかない。

「はいっ。」

マリーも黒いケープをはおり、嬉しそうに微笑んで返事をした。そして手をつないで店を後にする。

リアラの頭にシエルの言葉がこだまする。

沈黙の時間が動きだす……

何が起こるのか、シエルが何を考えているのかは分からなかった。でも、ゲームがそろそろ動くという事には変わりはないだろう。

リアラは繋いだ小さな手を握り締め、思う。

すべてが終わったらこの暖かな存在とも別れなくてはいけない。

それでなくても人間の一生はリアラにしてみれば一瞬の時なのだ。それを今更ながら寂しいと思った。

マリーは一軒一軒の家のポストや戸口の前にわずかながらではあるが、水と硬貨、そして食料を配っていく。

子供達が集まる家には中に入って食料と水を1人1人に配る。

そして具合の悪い子供には薬を与えていた。

貧困区の大人達は知らない。

毎晩マリーがこうやって水をくばっている事を。

それでもマリーは誰に感謝されるでもなく、続けている。

マリーを見ていると、ふとルチアの事を思い出す。

生命の魂は役目を終えると一旦天界にある母なる樹神木へと返る。

そこに返った魂は、木の中で浄化されまた新たな日常を刻む時まで眠るのだ。

母なる樹神木はファイそのもの。

ファイと木はつながっている。

ルチアは迷子になった魂だった。

しかも何を勘違いしたのか、リアラを樹神木と間違えてくつついてきたのだ。

それがあまりにも可愛かったから魂に器を与えて、天界で暮らすようになった。

天界では樹神木の世話をしたり、ルチアのように迷った魂を迎えに行ったり、結構いろんな仕事がある。

だからルチアのように器を与えられた魂が天界で暮らすってのはたまにある事なのだ。

器を与えるって言うても、ちゃんと樹神木についた卵から産まれるんだけどね。

だから天界に住む生命はみな兄弟であり家族なのだ。

ルチアもマリーのように人間が大好きだった。

ヒマがあればいつでも地上の人間達の様子を眺めている。

人間嫌いのリアラには全然理解出来ない気持ちだったけれど……

ふと、どこからか声が聞こえて来るのが分かった。

この声は……魔物達のささやき声だ。

「この国に天界からの使者が来ているらしい。」

「俺達を葬りに来たんだってよ。」

「なんで突然??？」

「でも大丈夫、あいつが言ってた。そいつは俺達には手出せるけど、人間には手は出せないんだってよ。」

「それなら……」

「……リアラ様？」

はっとしてマリーの方を振り返る。

今の話しは……。

ずっとどこかに隠れていたであろう魔物達の声だった。

沈黙の時間が動き出す。

こういう事だったの？

でも、なんだか嫌な予感がする。

「終わった？」

なんでもないという風に表情を取り作り、マリーに微笑みかける。

「はいっ」

「じゃ、帰ろっか。」

手を差し出すと、マリーは嬉しそうに小さな手を重ねてきた。

その手を離さないように握り締め、リアラは家へ続く道を急いだ。

そう、別れの時は刻々と迫って来ているのであった。

第5話：別れ

魔物達の会話を聞いてしまった翌日、リアラは自ら動き出す事を決めた。

その日の夕方、リアラはマリーを連れて教会へ向かった。

うわー。

協会の近くだっというのに空気悪っ。

それはこの国がいかにも魔の空気に包まれているかがよく分かった。教会の柵の前には浮浪者や孤児らしき人が何人も横たわっている。マリーは心配そうな顔をその人達に向けていた。

ギー

教会の扉を開け、中に入る。

レッドカーペットが続く先を見上げると、そこには綺麗な女性の像があった。

人の形をした女性の背中には大きな羽を付いていた。

左手を胸に当て、右手を前にかざして目を瞑り、微笑むその像には見覚えがあった。

てか、あれ……僕じゃん。

こんなにも忠実に再現された像があつたなんて知らなかった。

さすが‘始まりの地’。

国の歴史は変わろうと、教会だけは何者にも侵される事なくこうも歴史を再現しているなんて。

‘始まりの地’、そう、まさしくヒトが大地に生を受け、ヒトが最初に踏み入れた地。

その時リアラも一緒に地上に降りた。

‘修行’の1度目がこの土地だったのだ。

リアラは急いでフードを被る。

ま、本物より大分大人な感じに作られているからバレはしないと思うし、気づかれても似てるねーって事で終わるとは思っただけだね。神気を持つ教会の巫女にだったらバレるかもしれないけど……それにしても……

これ大分老けてない？

20歳くらい？

やだよあんな年増な自分。

僕の本来の姿は人間で言う7〜9歳くらいの姿だよ！！
心の中で文句をつける。

「わあ。すごく綺麗な天使様ですね。何ていう名前か知ってます？」

マリーが初めて見る聖堂に感激の声をあげながら聞いてきた。

「え．．．多分エヴァっていう名前じゃないかな。」

かつてここで呼ばれていた名を思い出す。

「エヴァ、この地の古語で、神の化身を表す言葉だ。」

「エヴァ様かあ．．．。」

マリィはほうつとした表情で僕．．．じゃなくて、エヴァを見つめる。

「あれ？エヴァ様って何かリアラ様に似てませんか？」

う．．．．．さすがマリィ。

痛いところついてくるね。

でも、こんなのと一緒にされたくないな！。

大人バージヨンの姿はどうしても気に入らないリアラだった。

「ちょっとやめてよマリィ、僕はもつと可愛いよ。」

うん。絶対こんなの嫌だ。

「うーん。そうですね。リアラ様はこんなに胸大きくないですしね。」

「

マリィが真剣な顔で言ってきた。

「．．．．それは僕に女の魅力がないって言いたいのか？」

まあ、胸なんて邪魔なだけだけどさ。

今の言いかたは、なんでかちょっとプライドが傷ついたぞ？

「え？？そんな事ないですよ？？」

マリィが苦笑いしながら否定した。

「確かにリアラ様って男の子口調だし、性格もお世辞にもおしとかとは言えないですけど．．．」

私はそんなリアラ様が大好きですし。」

「それー、どんなに頑張っても褒めてるようには聞こえないんだけどね？」

リアラが凍りついた顔で笑った。

「ほ、褒めてますよー！！」

あー！それより、どうして今日は協会に来たんですか？」

うお、こいつ、はぐらかしたな？

なんだか納得いかないが、仕方なくリアラは本題を切り出す事にした。

「マリー、君を教会に預けようと思ってね。」

マリーを長椅子に座らせ、自分もその脇に座ると、リアラは話しました。

いきなりの事にマリーの目が大きく見開かれる。

「マリー、マリーは王女なんだ。いつまでも僕と一緒にいちゃいけない。」

「ど、どうしていきなりそんな事言うんですか？」

私は王女なんか望んでません。いつまでも、リアラ様と一緒にいたいです。」

「君が望もうと望まないと、マリーが王女である事に変わりはないんだ。

それにもう王宮では王位争いは終わって、王女達は皆他国へ嫁ぎ、

王子は君の兄、デューイしか残っていない。

もうマリーの命を狙う者はいないだろう。

それに、マリーの事はデューイが守ってくれる。

何も心配しなくても良いんだよ。

まあ、最初は教会に預けて身の振り方を考えてもらっけどね。」

ごめんね。

ごめんね。

・・・どうしてだろう。

マリーは人間なのに。

いつの間にか僕にとっては大切な存在になっていたんだ。

大切だから怖いんだよ。

人間はほんとうに弱く、脆い生き物だから。
そして僕も……。

手にあるものを守るほど強くはないんだ。
それは過去の僕が証明している。
大切だった。

大好きだったあいつを傷つけた。
大好きだったのに、選べなかった。

僕が一番悪いのに。

だから離れるんだよ。

大切だから側にいちゃいけない。

たった5年……。

たった5年しか一緒にいないのに、どうしてこんなに大切に愛おしいんだろう。

「いやです！！マリー昔の事なんて覚えてないもん。王女なんかじゃないです。」

ずっとずっとリアラ様と一緒にいたいです。」

マリーが取り乱した様子で泣き叫ぶ。

僕だって……でも、それは無理な事なんだよマリー。

「リアラ様はもう、マリーが必要ないの？」

マリーの目からボロボロと涙が零れる。

……綺麗な涙。

リアラは細い人差し指でそつとマリーの涙を拭い、言いたくなかった言葉を放つ。

マリーの問いに答える事もなく。

「お別れだよ、マリー。僕の可愛い子。」

そう言つてニツコリ笑うとマリーから離れた。

リアラはグツと拳を握りしめると、神父のいる場所へ向かった。

「神父サマ、ちょっとお話ししてもいいですか？」

「はい、何でもしょう。」

振り向いた神父は30代後半くらいのとても感じのよさそうな人だった。

「・・・レベル1か、この人は大丈夫そうだね。」

神父はリアラの瞳の色を見て少し驚いた表情はしたもの、何も聞く事なくすぐに笑顔になった。

「ここの聖巫女に話があるんですけど、聖巫女に謁見は出来ませんでしょうか？」

「あいにくですが、巫女にお会いになる事はできません。」

「それは、人に会う事が出来ない状況にいるっている事ですか？」

リアラが心を見透かすような瞳を神父にむける。

神父の表情は崩れないままではあったが、リアラが只者ではないと察したようだ。

勘のするどい人間だな。

「・・・はい。」

嘘は通じないと察したのか、少し間を置いて神父は答えた。

巫女が床に伏せているというのは本当のようだな・・・。

「宜しければ、私で良かったら話して下さいませんか？」

こう見えて私、大司教補佐官を勤める者です。」

え？大司教補佐官といえば、教会におけるNO.3って事だよな。

ま、肩書きなんかどーでも良いけど、補佐官だったらマリーの事知ってるだろうし、この人は魔に食われるなんて事なさそうだしね。
「では司教サマ、突然ですが、あの娘を引き取っていただきたいんです。」

下を向いて座っているマリーを指差しながら用件だけを伝える。

「あの娘は、5年前に行方不明になった王女、マリーシュビエーヌ・ヴァン・オルセン・ルージスタイン。」

そこまで言くと、ようやく事の重大性を理解したのか、司教の顔から微笑みが無くなった。

「まさか……。」

あの暗殺事件は王妃の手の者達だったらしい。……後日シエルに聞いた。

あの時、王は王妃の策略を知っていてマリーシェとデューイを呼び出したのだ。

まあ、王妃にしてみたらマリーシェとデューイを一遍に片付けられる絶好のチャンスだったわけだから、王に呼び出されたというのは誤算だったのだろう。

教会側もマリーの行方を内密に探していた。

マリーは産まれて2年間くらい、教会に預けられていたらしい。

それもあって今日、マリーシュを教会に預ける事にした。

ルージスタイン王国におけるユーノシス教会は、唯一王に対抗できる勢力だ。

王政と教会は常に対等であり、何者にも侵されてはいけないのだ。

今は聖巫女が床に伏せているため、教会の権限も落ちてはいるものの、本来ならこんな状況はありえないのである。

気になる事もあって聖巫女と話したかったのだが、仕方が無い。多分僕の予想が当たっていれば、っていうか、ほとんど確信に近いから、マリーシュが教会側に殺される事はないだろう。

それに教会は争いを望んではない。

司教はリアラがマリーの真名をしっている事に驚いているようだった。

王族には真名というのが存在する。

それは本人と、出産の祝いの儀に参加する聖巫女と教会の一部の者しか知らないトプシークレットなのだ。

王の子は皆聖巫女に名をもらう。

真名は神にのみ告げる神聖な証。

なんでも、自分の名を神にささげ、神への忠誠を誓うとか……

そして真名は決して人に明かしてはいけない名。

それをリアラが知っているのだから司教からしてみれば驚くのも無理はないだろう。

「貴方は……。」

「話しは以上です。信じるか信じないかは教会側あなたたちの勝手です。残念ながら王女マリーは誘拐される以前の記憶を失っていますし。」

司教の言葉を聞かずにリアラは用件だけを伝えていく。

「では、僕はこれで失礼するね。はい、これ。」

リアラは何やら重そうな袋を司教に渡した。

「何ですかこれは。」

「水と食料、それとここの硬貨だよ。」

「こんなに……いただけません。」

司教は驚いた顔で袋を付き返してきた。

「あのね、別にキミにあげるわけじゃないの。僕はマリーにそれをあげるんだ。だからそれをどう使うかマリーに決めさせて。」

マリーも協会もそれがいらなくて言うなら捨ててもいいから。少しづつきらばうに答えるとリアラはくるっと向きを変えてドアの

方へと歩きだす。

ぐいつ。

「リアラ様!!」

マリーが走ってきてリアラのケープの端っこをつかんだ。
後ろには涙でぼろぼろのマリーが立っている。

リアラは振り向かない。

別れがこんなに悲しいものだなんてね。

きつともう会う事はないだろう。

それでもマリーには生きていてほしかった。

だから、僕といちゃ駄目なんだ。

僕もファイと同じ……自分が何も出来ない存在だって知っている。

やろうと思う事さえ許されないんだ。

まあ、ファイは僕以上だからきつと僕なんかよりずっと苦しんでいると思うけどね。

デューイ、君がうらやましいよ。

自分の手で未来を変えられる力を持っている。

「マリー、離して。」

冷たい声が協会に流れる。

「リ、アラさ、ま。」

マリーの声が震えているのが伝わる。

リアラはぎゅっと手を握り締めると歩き出す。

「さよなら、マリー。」

僕は僕のやるべき事を……………。

マリー、君なら大丈夫。

城にはデューイもシエルもいるし。

君を守ってくれることだろう。

さよならマリー。

僕の愛し子よ。

幸せにおなり。

君にはその力があるから。

悲しみに負けないで。

僕はずっと君を見ているよ。

風に乗せて歌った。

心を締め付ける。

ファイ、僕も人間を好きになれたよ。

まだ皆つていうのは無理だけど。

マリーの事は愛おしいって思う。

あんな人間もいるんだね。

第6話：異変

魔物達が溢れる荒れ果てた町の中、カキンカキーンと剣の音だけが
一帯に響いている。

「デューイ様、お怪我はないですか？」

ギルがデューイの後ろから声をかける。

デューイと、デューイ付き近衛隊一行はルージスライン王国の東の
端に位置するカリムという町に魔物討伐に来ていた。

最近の魔物の発生率はかなり異常で、デューイはこの国に何か起こ
るのではないかと心配していた。

リアラが去った後、デューイの身柄はギルによって発見され、城に
運ばれた。

奇跡的に助かったのだと医者は言っていたけど、それが奇跡ではな
い事をデューイは知っていた。

あの少女が助けてくれたのだと……。

それからのデューイは前以上に剣術や勉強に打ち込むようになった。

ギルもあの一件からなんだか人が変わったように、しっかりとした
意思を持って行動するようになった。

普段はふざけているし、女癖もあまり良いとは言えないけど、やる
ときはやる男だ。

剣の腕も以前と比べ物にならないくらい上達し、今もデューイの背
中を守って戦っている。

城内では、デューイを王にするために裏でいろいろ動いてくれているようだった。

昔のギルからはあまり想像できない事だ。

おどおどした目つきは一遍し、デューイに言われなくても自分の頭で行動し、デューイの側近であり、護衛である役目をこなす。

それが頼もしくもあり、寂しくもあった。

けれど、友人という所は変わらない。

自分も王であるために、捨てなければいけない甘さは捨てた。ギルだけに変わらないでいてほしいというのは筋違いだろう。

マリーシュの行方は全力をあげて搜索したが見つける事が出来なかった。

貧困区には難民や捨てられた子供、浮浪者が大勢いる。

そんな中でマリーシュ1人を探すのはとても困難な事だった。

それほどこの国は政治の手が行き届いていないのだ。

犯罪は日常茶飯事。

貴族達はやりたい放題。

けれど、デューイはこのままにしておく気は全然ない。

今は貴族達の悪行を全部物的証拠を残して、咎める事はしない。存分に泳いでもらう。

もう少しでデューイは16になる。

この国では16になると成人の儀が受けられる。

成人の儀を受けた後はどうにかして王を失脚させ、自分が王位に就くのだ。

それまでの5年はその下準備でしかない。

デューイは5年の間に城内にいる3分の1を見方につけた。

何も知らないのは無能な王と怠慢貴族達のみ。

けれど、最近はおちこちの地で魔物が異常発生し、村が次々と襲われている。

それを食い止めるために今回、王の命令でデューイがカリムに向かう事となった。

・・・何かある。

王が自分にこのような事を命じるなんて・・・

魔物討伐に行つて帰ってくるなという意味ならまだ理解出来るが・・・

自分がいない間に、何かしようとしているのか？

それとも・・・

何か分からない不吉な予感がデューイの頭から離れない。

「デューイ様、後ろ！！」

ギルの声にハツとして、後ろを振り向く。

くそつ。死角を突かれたか。

デューイの左目には紺色の眼帯が付けられている。

そこには大きな黒い塊がデューイに襲いかかるうとしている所だった。

やばいと思い、とつさに攻撃の体勢を整えたその時、青い光が広がり、ギーーーーーという魔物のすさまじい声があたり一面に響いた。

「デューイ様、遅くなりました。」

声のほうを振り向くと、そこには灰色の髪に金色の瞳を持つ3年振りに見る、友の姿があった。

「シュイー！」

シュイと呼ばれた青年は、デューイの前で片膝を付くと最敬礼の形をとった。

「シューイルダ・カルロンドス、ただ今帰還いたしました。」

「よく戻って来てくれたな。」

デューイはシュイの肩をポンポンと軽く叩く。

「ところで、精霊の方はどうだった？」

そう、シュイはこの国最後の魔法師一族。

カルロンドス侯爵家の時期当主なのだ。

しかもシュイはカルロンドス家200年振りの大魔法師。

彼の持つ魔力は絶大で、わずか10歳という若さで大魔法師の称号を得た天才中の天才。

そして3年前、大精霊と契約するためにシュイは1人で旅に出たのだ。

今年18歳になるシュイとギルは幼馴染で、シュイもよくデューイの所へ遊びに来ていた。

「かなりてこずって3年もかかったよ。でも無事に水の大精霊と契約できたぜ。」

シュイは笑って言うが、それでも大精霊と契約する事は本当に大変な事だ。

ここ数百年、大精霊と契約を果たした者はカルロンドス家の200年前の当主のみだったという。

「ηζρψΥΈ 山氷ζκëゞ√山ζγφ6」
シユイが何やら呪文みたいなのを唱える。

すると、シユイの脇に青い光が広がり、美しい青い髪 of 精霊が現れた。

「これが…….?」

「うん。大精霊ウォーティーネ。」

ちっちゃい炎の精霊だったら前にシユイに見せてもらった事があったが、精霊ってこんなに美しいものなのか。

というより、精霊から感じる空気が重い……。

「おい小僧。コレとはなんぞや。口の利き方に気をつけい。」

ウォーティーネは不機嫌そうにデューイを睨む。

「あはは、わりーな。いきなりだから驚いているんだよ。」

「まったく……。」

お主等の国には、もつと敬意を持てる者はおらんのか……。

ラーティーネは呆れたため息をつく。

シユイは几帳面ではあるが、楽天的で、豪快な性格をしている。

シユイに敬意とかを求めるのは難しい話だろう。

「しかしお主、良い目をしておるの。」

ウォーティーネが目を細めデューイを見つめる。

そして、なぜかいきなり笑い出した。

「ふははははは、面白い。面白いぞ。」

そなた、まれに見る興味深い人間じゃ。名は何と申す?」

「デューイ・ルースタイン。」

デューイは臆する事なく、ウォーティーネを見据え堂々とした態度で名を名乗った。

「ほう、ではそなたが王か。」

「まだ、王ではない。」

「そうか、しかし……。」

ウォーティーネは一瞬ちらつとギルを見る。

そしてそのままの目線で遠くをじっと見つめた。

「まあよい。わしはもう行く。我が契約者は良い主を持ったな。」

そう言つてニコツと笑つとパアッと光の粒となつて消えてしまった。

「なんかやけにデューイ気に入られていたな。俺なんか3年もかかったのに。」

シュイがふてくされながら文句をたれる。

「あはは。いかにも気の強そうなんかんだたね。」

ギルが笑いながらシュイの片を叩いてきた。

「お前なあ、俺の苦勞も分かれよ。気の強いレベルじゃなかったさ。最初会つた時なんかうるさいハエつて言われたんだぜ？いきなりハエ呼ばわりされて、しかもすんごく睨まれてマジびびつたから。」

「シュイ、ウォーティーネに会つて何言つたんだよ。」

デューイが念のため聞いてみた。

「ああ、惚れたから契約して愛人になつてくれつて……。」

「はあ……。」

デューイが呆れた声をもらす。

ギルなんか腹をかかえて笑い出すしまつだ。

「そしたらハエ呼ばわりされて、持っていた扇子ではたかれたよ。まるでハエたたきでもするような感じで……。」

ギルの笑い声が一段と大きくなる。

「お前……。」

精霊を総べる大精霊に向かつて……。」
よくそれで生きて帰つてきたと逆に関心してしまった。

「でも、シュイが戻つてきてくれて助かった。後は国の掃除をする

までだ。

帰るぞ。」

デューイがマントを翻し、歩き出す。

「デューイ様、魔物退治はいいんですか？」

ギルが笑いを抑え、隣を歩きながら聞いてくる。

「何か嫌な予感がする。」

来る前から感じていた変な予感。

それがだんだんと濃くなっていく。

ウォーティーネの視線の先も王都の方向だった。

デューイは一刻も早く帰って予感が外れている事を確かめたかった。

「今から馬を飛ばして王都にはいつ頃着く？」

「時刻と夜刻の間には……。」

「そうか、シユイ！そこら一帯を掃除しておいてくれ。お前の足
だつたらすぐに追いつくだろう？」

早くも浄化の体勢に入っているシユイに声をかける。

「まったく、帰ってそうそうき使われるはめになるとはね……。」

OK。こっちはまかせて早く帰んな。実は俺もなんか感じてたんだ。

」

「助かる。」

そう一言言つと、馬を蹴り、王都へと急ぐ。

胸のざわめきが消えない……。

それは、これから起こる幼い少女の悲劇の予兆でしかなかった。

第7話：悲劇

時は夕刻。

リアラは紅茶を飲みながら向かえが来るのを待っていた。

魔物達の話しから推測すると、まもなくリアラの事を始末しに来る者達が現れるだろう。

それも、人間を使つて。

それに伴い、普段人っ子一人出歩く姿が見えないはずの広場が今日は何だか騒がしい。

誰が僕の情報を流したのか……大方予想はつくけれど。

まあ、それも運命なのかもね。

それにしても本当、救いようないよね。

この僕を手につけようだなんてさ。

未練なんかない。

ただ、マリーの事だけが気がかりだった。

人間に情を移すなんて、観察者失格かな……。

でも、どうしてもマリーの笑顔を守りたかった。

リアラは、魔物達の狙いが自分の魂を狙ってやって来ると確信していた。

だからその時を狙ってこの地一帯を神気で浄化させるつもりだった。そんな大きな事をしたらリアラだってどうなるか分からないにも関わらず。

ただ、マリーがこの国を好きだと言ったから……。

ざわざわざわ・・・

外が一段と騒がしくなってきた。

ドンドンドン！！

扉の叩く音がする。

まさか、本当に昨日の今日で来るなんて。

以外に行動力はあるんだね。

マリーを置いてきて本当に良かったと思いながら一応フードを被って扉を開ける。

「お前が魔女だな？」

すごい形相をした人間達が一斉にリアラを取り囲む。

あー、皆ほとんどレベル3以上。

中には自我失っている奴らもいるし。

しかも魔女だなんて・・・唐突すぎじゃない？

「おい！！答える！！」

体格の良い男がリアラに詰め寄る。

「あー、うるさいなあ。本当バカばかりで嫌になるよ。」

こんな奴らのためにリアラは毎晩水を配ったりしていたのか？

「なんだその態度は！！」

男がリアラの頭をバシッと叩いた。

その瞬間、リアラの被っていたフードがパサッと下に落ちた。
一瞬にしてざわめきが起こる。

そう、その少女はとても美しい、そしてその美しい少女の髪は漆黒の闇の色。

何もかもを見透かすような透き通る瞳は綺麗な緑の瞳だった。

「うわああああああ。」

誰かが気でも触れたかのように叫ぶ。

それもそうだろう。

闇に心売り渡した人間にとってリアラの瞳は美しすぎた。

「………異形の者。」

誰かが呟く。

「魔女だ。」

「魔女だ。」

「災いの魔女だ!!」

目を血走らせながら叫びたてる。

「殺せ！！殺せ！！魔女を殺すんだ！！」

リアラは大きな棒に縄で縛り上げられると、広場の方に連れて行かれた。

ああ、昔を思い出すな・・・
もう何年前だったかも覚えていないけど・・・

「殺せ！！魔女を殺すんだ！！」

民衆が集まり、叫びたてる。

そんなに元気なら、もっと自分達のためになる事をしろよ。

「魔女を殺せー！！」

野次馬達が一斉にリアラに向かって石を投げつける。

あたりはもう闇で包まれていた。

上から見下ろすその景色はあまりにも滑稽で笑えてくる。

グサツ。

鋭い痛みがかけぬける。

誰かの突いた槍がリアラの太ももを貫いた。

リアラの白い足から、真っ赤な血がしたたり落ちる。

簡単には殺さないってか？

一応人間の体だから・・・痛いもんは痛いんだよね。

ふと真下を見ると、リアラの真っ赤な血を舐める人間達がいた・・・

それは、魔物・・・。

人型を模った魔物の姿。

もう、そこまで侵食されていたのか。

もう一本の槍がまた、リアラの足に刺さった。

すさまじい激痛がリアラを襲う。

普通の人なら、周りの人間達の酷い形相や罵声で恐怖に怯えるか、激しい痛みで悲鳴をあげ、気絶してしまうだろう。

しかしリアラはうめき声1つあげる事もなく、

ただ、哀れなモノでも見るかのような視線を投げかけるのであった。

その美しい緑の瞳に周りは怯え、その弱さを隠すかのように、次々に石や罵声を投げかける。その姿は本当に哀れで、惨めだった。

リアラの心はどんどん冷えきっていく。

それとは反対に、人々の心はどんどん魔に取り込まれていく。

3本目の槍がリアラに向けられる。

全部・・・・消してやる。

リアラが力を解放し、ここにいる魔物も含め、魔に心を支配された人間すべてを消し去ろうと力を使おうとしたその時、暗闇の中でキラッと光る何かが見えた。

「やめて！！！！やめてください！！！！！！」

・
・
・
・
・
マリー？

マリーは叫びながら必死の思いで群がる野次馬達を掻き分けると、

リアラの前に立ちただかり、両手を広げた。

どうしてここに？

「どうして来たの？マリー！！」

リアラが叫ぶ。

するとマリーは、

「もう、私はずっとリアラ様と一緒にいたんですよ？

リアラ様が不器用な方だっというのを知っています。

リアラ様の愛情は分かりにくすぎです。」

怒っているのか笑っているのか分からないような、そんな表情で答えた。

「そこをどけ！！」

誰かが叫ぶ。

「ときません！！皆さん、こんな事をして許されると思っているんですか？」

マリーの瞳は真っ直ぐだった。

怖いはずなのに、怖くないはずなんかないのに……

震える両足をふんばって両手を広げている。

「マリー、どいて。

僕は大丈夫だから！！」

リアラが叫ぶ。

「嫌です。ときません！！！！嫌われてもいいです。私はリアラ様

が大好きですから。

それにこの国も好きなんです。だから絶対どきません。」
「ばか、こんな時に何言ってるんだよ。」

嫌いになるわけじゃない。

だから、どいて、逃げて・・・

「どけ！どかないとお前も殺すぞ。」

ゾツとするような声が投げられる。

「そうだ、こいつも魔女の手先だ！！！！」

誰かがマリーに向かって石を投げた。

それがマリーの頭に当たる。

マリーの頬に赤い血がつたっていく。

「やめて、マリー、お願いだからそこから離れて。」

「殺せ、殺せ！！！！！」

リアラの声が野次馬達に掻き消されていく。

・・・やめて

・・・やめて！！

「おい！！そこで何をしている！！！！！」

誰かの声が聞こえた。

この声は・・・

デューイ？

その時・・・

ドシュッ

肉が裂けるような音が聞こえた。

たくさんの血の臭い・・・
これは僕の血の臭い？

ちがう

これは・・・

「マリーーーーー！！！」

その瞬間、リアラの体が一瞬光に包まれた。

周りにはあまりにも一瞬の事で一体何が起こったか分からない。

気がついた時には、リアラの手と足に固く結ばれていた縄は解け、少女は地面に降り立っていた。

リアラは自分の足に刺さった槍を引き抜き、マリーに駆け寄る。

愚かな・・・・・・・・愚かな・・・・・・・・

『愚かな・・・・・・・・。』

その声はリアラの声。

それは頭に直接響く神の声。

どこまでも響く、美しい声。

しかし、それは恐ろしい怒りの声・・・・・・・・。

いつせいに周りの音が静まった。

人も風も何もかもが、時間が止まったかのようにピタリと動きを止める。

誰も動けないでいた。

マリーの腹部から流れる血だけが止まる事なく、とくとくと流れていく。

リアラは急いで神気を送る。

そこにいる誰もが動けず、目の前の美しい、異形の色を持つ少女を見つめていた。

「少し痛むが我慢しろ。」

そう言つと、マリーに突き刺さつた槍をズツと引き抜く。

リアラが神氣を送っているおかげで血が溢れる事はなかったが、それでも血はトクトクと流れ出る。

槍を引き抜いた瞬間、マリーのあああつという悲痛なうめき声が響く。

くそ……

本来の体だつたらこんな傷一瞬で治せるのに。

それもこれも……

『愚かな人間たちよ。……』

リアラの怒りの声が人々の頭に響く。

『貴様ら、毎朝戸口にある水を飲んでいただろう？』

その話題に人々はハツとする。

『その水や食料、誰が運んでいると思つていた？』

神のおかげだとも思つていたか？』

本当に人間は、愚かだ……

そして、こんなにも脆い……。

『この少女がそなた等の命を助けるために毎晩重たい水を運んでいた事知っておるのか？』

それを魔女の手先呼ばわりとは……
本当の魔はそなたたち自身とも気づかずに！！！！』

その真実に周りはどよめいた。

それはそうだろう……

リアラの運ぶ水やパンにどれだけの人間が命を救われた事か……

・

マリーの行為に、貧困区の民達は支えられていたのだ。

どれくらいの人々がそのわずかな水や食料に支えられてきたか……

・

知っているからこそ、その事実は衝撃的だった。

こんな幼い少女が自分達を支えていてくれた存在だった。

そしてそんな少女に自分達は自らの手で石を投げ、槍を突き刺したのだ……

『ああ、そうだ。これは返すぞ。』

低い声で言い放つと、リアラはさっき自分から引抜いた槍と、マリーから引抜いた槍を片手で持ち上げ、鋭い光とともに魔物達に投げつけた。

リアラの放った槍と光は、リアラの血を飲んでいた男の姿をした化け物達に突き刺さった。

化け物達はギャツツと一瞬叫び声を上げると、黒い霧になって消えていった。

リアラの手によって魔物が消滅させられたのだ。

リアラはもう一度手をかざし、光を放つ。

すると魔女に夢中になっている人間達にまぎれていた魔物達に次々

と光の矢が刺さっていく。

人間達はピクリとも動かない。

いや……動けないのだ。

恐怖とも言って良いほどの威圧感に身を震わせる事しか出来なかった。

そして、こんな身近に魔物達が潜んでいた事に驚いていた。

自分達もそれほど魔に侵されているとも知らずに……。

ここにいる奴ら……全部消し去ってやる。

リアラが再び手をかざそうとしたその時……

「リ、……リアラ様。」

マリーが、リアラの心を引き止めるかのようにリアラの名を呼んだ。そして、震える手で、リアラが治癒を施している腹部を押さえている手を掴むと、そっと自分の手で包みこんだ。

「何をする……このままでは死んでしまうぞ……！」

リアラは急いでマリーの手を放させようとする。

死なせたくないんだ。

それでもマリーは手を放そうとはせず、手を握る。

リアラがもう一度、手を放せと言おうとしたその時、

「マリーシュ……！」

沈黙の中で、誰かのよく響く大きな声がリアラの耳に届いた。

1人の青年が、リアラとマリー元へ駆け寄って来る。

「マリーシュ！！マリーシュ！！」

必死でマリーを呼ぶその青年は、5年前に生き別れになったマリーの兄、デューイだった。

「お兄、様・・・」

マリーはデューイの顔を見ると、少し驚いた顔をした後に、ニッコリと微笑んだ。

「マリー、記憶が・・・。」

そう、確かにマリーシュはデューイの事をお兄様と呼んだのだ。

「ごめんなさい、リアラ様。本当は記憶なんてとづくに戻って、いたの。」

でも・・・リアラ様と一緒に、いた、かったら・・・お兄様もごめんなさい。

探しててくれた、の、知ってた、のに。」

途切れ途切れに話すマリーはとても苦しそうだ。

だけど、苦しいはずなのに、マリーの顔はとても穏やかだった。

9歳の少女のどこにそんな力があるというのだろうか・・・

「いいんだマリーシュ。お前が生きていてくれたから。」

デューイは5年ぶりにやっと会えた妹を抱きしめたい気持ちにかられながらも必死で傷口を布で押さえる。

それでも血は止まらない。

リアラの真っ白なワンピースが自身の血とマリーの血で赤く染まっていく。

「でも、お兄様・・・さい、ごに、会えて・・・良かった。」

「最後だなんて言うな！！！！」

デューイの悲しい声があたりに響く。

「そうだよマリー。」

最後だなんて。お願いだから手を離すんだマリー、早く血を止めないと・・・。」

リアラの顔もマリーと同じくらい真っ青だ。

「・・・いいえ。リアラ様、聞いてください。」

マリーの青い瞳がリアラを見つめ、その強いハッキリとした声が静まり返った広場に響きわたる。

決して大きな声ではないけれど、その声はどこまでも澄んでいた。

リアラはハツとした。

マリーの体が、淡く金色に光っているのだ。

それは、リアラや教会に仕える、聖巫女なんかが持つ神気の手だ。

マリーにも神気を放出させる能力が備わっていた。

そして、その力が魔を浄化させる事が出来る事をマリーは知っていた。

だからマリーは、最後の力を振り絞って、この地一帯を浄化しようとしているのだ。

マリーにはその力があつた。

でも、決して使つてはいけないと、リアラに固く禁じられていた力だ。

それを使つたりなんかしたら、一発で魔物に狙われてしまう。

その力を、マリーは自分を手にかけて人達のため、浄化させようとしているのだ。

神気の手には傷を治癒する効果もある。

それを自分に使わず、放出すると言う事は・・・

リアラはマリーの意思に気づき、止めようとする。

マリーは、それを遮るかのように首を振り、ニツコリと微笑むと震える声で、話し始めた。

「確かに……人間は弱くて、愚かで、どうしようもない生き物かもしれません。」

リアラ様が教えてくれたように、自分達が他の生き物の命の上に立っている事すら忘れている……。

けれど、……。それでも人は美しいです。」

マリーは、リアラに……。周りの人々に語りかける。

「笑ったり泣いたり怒ったり、時には迷う事もあるでしょう……。

しかし、それでも短い一度きりの人生を皆精一杯生きています。
みんな輝きながら生きる力があるのです。」

そんなふうに生きれる人間は、他の生命と等しく、美しいと、思うのです。」

マリー……。

キミ心は、どんな目に合おうと、決して失われる事がないんだね。

それはどこまでも真つ直ぐで、すこし儂くて……。だけど、けっして闇に囚われないまっさらな心。

「皆さん……。決して苦しみや悲しみに囚われないで……。命の尊さ、人を信じる事を……。忘れないで下さい。」

そして……。リアラ様。

どうか、どうかお赦してください。

哀れな彼らは、己の欲に負け、闇に心を奪われ、罪悪感から逃れる事ばかり願ひ、

己の罪と決して向き合おうとしなかった……………。

一生背負う覚悟がないのなら……………

一生背負う覚悟がないのなら、

彼らの罪も、苦しみも、そして悲しみも……………すべて私が、連れてゆきましょう。」

マリーの瞳から雫が溢れ、頬をつたって流れていく。

「うふふ……………」

私……………、とて、も、欲張り……………なんで、す。」
そう言つてニツコリ笑う。

「この国、も、リアラさ、まも、……………全部、まもり、たか……………
った。」

ああ……………、マリー。

そんな君だから僕はキミに惹かれたんだね。

マリーは知っている。

命は等しく存在し、それと同じく死も存在する事を……………
だから、僕がその死を一時の感情で妨げてはいけないのだという事

も・・・・・・・・。

そして僕がここにいる奴等すべてを消そうとした事も・・・・・・・・。

「本当にキミは・・・・・・・・バカだよ。」

けれど、そんなキミがどうしようもなく愛おしい。

マリーはクスツと笑う。

まるでリアラの心をすべて分かっているかのように。

「リアラ、さま。」

マリーの声が掠れていく。

「私は、幸せでし、た。

絶望の、暗闇の・・・・・・・・中、リアラ様が差し伸べてくれたこの暖かい・
・手が、わ、たしの、光であり、すべてで、した。」

マリーはニツコリ笑う。

最後の最後で何言ってるのかなー。

僕の光こそ、マリー。君だったんだよ。

「うた、って、ほしい、な・・・・・・・・」

わた、し、はもう、歌え、ない・・・・・・・・けど、リアラさまの、うた、
も、大好きなんで、す・・・・・・・・。」

「そっか、じゃあ、一緒に歌おう。」

リアラが微笑むと、マリーは安心したように瞳を閉じた。

それでも、神気を放出しきってしまったマリーの呼吸はとても苦し

そうだ。

リアラは、せめてマリーが苦しくないようにと、繋がれた手から神気を送る。

するとマリーの脇腹から流れていた血はピタリと止まり、マリーの呼吸も安らかなものとなった。

リアラはマリーの手を握り締めたまま体を抱き上げると、デューイの方に振り返った。

「デューイ。悪いんだけど、馬を貸してくれるかな。」
デューイは何も言わず、頷くと、黒い綺麗な馬をリアラの前に連れてきた。

リアラはマリーを抱えながら、器用に馬の背に飛び乗った。
まるで背に翼でもあるかのようにふわりとした仕草だった。

広場にいた民達は、マリーの言葉を聞き、マリーの神気で心を浄化され、皆が膝を地につけながら涙をながしていた。

己の愚かさに今頃気づくなんて……
しかし、もう遅い。

マリーはもうじき行ってしまう。

それでも、マリーは人々の愚かさを、罪を……自分と共に連れて行くと言った。

『愚かで、弱き者達よ……』

馬にまたがり黒髪の少女が言葉を放つ。

少女の白いワンピース、そして手や足までもが血で赤く染まっていた。

しかし血色で染められながらも、馬にまたがるその姿は、まるで女神のように美しい。

リアラの翡翠の瞳が、心まで見透かされるような視線が、愚かな人間達を捉える。

『この少女の清き思い、無駄にするではないぞ。

そして忘れるな。この少女はそなた等の罪をすべて背負い、天に連れてゆくと申した。

この少女が愛した国……

だから私もそなた等を……赦そう。』

赦される事は、何より大きな慈悲であり逃れる事の出来ない罰だと・

……

この人間達は知ってるのかな。

そしてリアラは、嘆く民を背にし、マリーと一緒に走り出した。

レクイエム

リアラとマリーは国が見渡せるあの丘の上に来ていた。

リアラは歌う。

その声は風に乗り、国中に広がっていった。

国中の人達がどこからか聴こえてくるその歌を聞き。涙を流した。
聞いた事の無い歌。

とても美しい響き、声、メロディー。

けれど・・・・・・・・それはとても悲しい響きだった。

まるで、泣いているような・・・・・・・・

世界で一番美しい、そして一番かなしい歌。

・・・・・・・・レクイエム。

死というものがこんなに悲しいとは・・・・・・・・
こんなに悲しい気持ちはいつぶりだろう。

マリーは目を開ける事はなく、微笑みを残して眠るようにリアラの腕に横たわっていた。

マリーの魂が、安らかに眠れるように……

優しいメロディーが響く。

いつのまにか雨が降っていた。

それは、この国が長い間待ち望んでいたものだった。
恵みの雨はしとしとと降り注ぐ。

リアラはマリーが雨に濡れないようにとマリーの体の表面を空気の膜で覆った。

リアラの頬に雫がつたう。
それでもリアラは歌い続けた。

マリーの魂を見届けると、リアラは歌うのをやめた。
それでも空を見上げ続ける。

リアラの頬をつたう雫もあとからあとからしたり落ちる。

「…………泣いているのか？」

後ろから年若い青年の声が聞こえた。

「うん。僕のかわりに空が泣いてくれてるんだ。」

後ろを振り向かず、あははと笑いながらリアラは答えた。

青年は、広場を去ったリアラ達を追い、丘までやってきた。

リアラの歌声はこの世のものとは思えないほどに美しく、それでいてとても悲しいメロディーだった。

少女の見せる横顔は、多少幼く見えるが、とても美しい。

そしてそんな少女の瞳はどこか悲しげで、けれど真っ直ぐに空を見つめていた。

少女の美しく悲しい歌声に耳をかたむけ、青年はだまってその儚げな少女を見つめていた。

歌が止み、青年は気づく。

少女の頬からながれる雫の存在に……

流れ落ちる雫は雨なのか……それとも少女のものなのか……

……

しかしそんな雫でさえ輝いて見える。

青年は震える心を胸に留め、少女に問いかけた。

泣いているのか……と。

「悪かったね。キミの大切な妹をずっと拾ったままにしてて……」

「

リアラは本当に申し訳なさそうに青年に詫びた。

しかし瞳は一向に空を見つめたまま放れない。

「いや、マリーシュはお前のそばにいて幸せだっただろう。」

それは、マリーの最後を見ていれば分かる事だった。

幸せそうな顔をして微笑む彼女は、たった9年の短い生涯を、人々

のため、そしてリアラのために捧げたのだった。

それでも精一杯生きたのだと少女は言うだろう。

5年……

リアラにとって5年という月日はあまりにも一瞬だった。

けれどとても長く充実した年月だったと思う。

「キミは、うまくやってるみたいだね・・・デューイ。」

リアラはふくみ笑いを浮かべながら青年の名を呼んだ。

「俺はこの国を変えてみせる。」

「・・・そう誓ったからな。」

「そのためには、手段を選ばない・・・でしょ？」

デューイの眉がピクリと反応した。

「ま、そーだな。」

「それで良いんだよ。そしてその沢山の犠牲の上に立ち続けなければならぬ。」

それが王だ。」

「そうだな・・・。」

けど俺は、俺の大切な人達は守る。

国を、友を、この国に住む人々を・・・。

守りきれず命を落とした者も沢山いる。

でも、だからってそこで守る事を諦めたら王でになる資格なんか無いって思っているから・・・。」

それは王になると決めた時からの、デューイの決心。

揺るがない信念。

「ぼくの助けたアホ王子は、だいぶ成長したみたいだね。」

その時初めてリアラは振り向いた。

デューイの心臓がどきっと大きく跳ねた。

ニツと笑った少女のその顔は、年のわりにはまだ幼くて、意思の強そうな大きな瞳は、どこまでも真っ直ぐで、相変わらず遠くを見つめていたが、それでもやはり美しいと思う。

そう、初めて会った時のような、いたずらな笑顔・・・。

いったいこの少女は何者なんだ？

それは、初めて会った時からの疑問だった・・・。

しかし、その事には触れてはいけなような気がして、デューイは

自分の心を抑えるようにため息を吐く。

「お前……アホ王子って。」

まがりなりにも時期国王に向かつてアホ呼ばわりとは……あまりの言い様に不快を通り越しておかしささえこみ上げてくる。

確かに……俺はアホだったかもしれないな。

何もかもから逃げていた自分を思い出す。

と、その時……奥の方で足音が近づいて来るのが聞こえた。

「デューイ様、ここにいたんですか。」

がさつと草むらが揺れ、そこからギルが姿を現した。

ギルはリアラに一瞬視線を向け、ふうつと息をつく。

「もう、いきなり馬に乗ってどこかに行っちゃうんですもん……探しましたよ。」

「ああ、悪い。」

「まったく……。広場の方はシュイが後始末をつけています。ほら、風邪ひくから早く城に戻ってください。」

それと、そちらのお嬢さんも2・3話を聞きたいので城まで来ていただきます。

あ、あと、マリーシュ様の遺体を慰霊室に運びますので……その……お気の毒でした。まさかこんな形で再会するなんて……

ギルの表情が曇ったものになっていく。

「いや……いいんだ。」

マリーシュの遺体を運んでくれ。」

デューイがそう言うのとギルの後ろに控えていた兵士達がリアラの手からマリーを連れて行ってしまった。

マリーは一瞬キツとギルを睨む。

ギルはその視線をスルリとかわすと、デューイとリアラを城へと促した。

リアラは大人しくギルにしたがった。

まだ完全に片付いたわけじゃない……。

しかし、自分に出来る事などもう何も無い。

それでもマリーが愛した国だ。

あとはデューイに任せるしかないね。

城に着くと待機していた侍女達はリアラの姿を見て驚きの声をあげた。

無理もないだろう……

リアラの手に着着していた血は雨によって流れてしまったが、白いワンピースは真っ赤に染まっており、足にも深い傷痕が目立っていたのだから……。

そして声を上げたもう1つの理由……

それはやはり、リアラの色だった。

真っ直ぐに伸びた漆黒の髪、緑色の瞳。

この地では異形とされるその色に驚かない人なんてこの国にはいないだろう。

侍女達の声を聞き、デューイは改めて隣に立つ少女の姿を見つめた。
……幸い骨には異常はなかったにしても、立っているのがや
つとだつたろうに。

リアラの様子を見ると、怪我などしていないように見えてしま
う。

痛くないはずなのに……

普通精神では到底無理な事だった。

丘からここに来る間も、一度も痛いようなそぶりなど見せなかった。あの広場でおこった惨劇を思い返す。

それはまるで地獄絵図のようだった。

あの場にいた人々の行動は尋常ではなかった。

何か嫌な予感がすると王都に戻ったものの、騒ぎを聞きつけ、急いで広場に駆けつけた時はさすがのデューイも驚きで身が震えた。

大きな木の柱にくくりつけられていたのはまだ幼さが残る美しい少女。どこか見覚えのある少女だった。

その少女に民衆は人の表情とは思えないほどの恐ろしい形相で、罵声と石を投げつけていたのだ。

そればかりか、足元には槍まで刺さり血がしたたり落ちている。

それなのに少女はうめき声1つあげる事もなく毅然とした態度で民衆を見下ろしていた。

まるですべてを受け入れるかのように……。

しかし、デューイが声をかけた時にはもう手遅れだった。

少女の悲痛な叫びが辺りに響き、怒りの声が広場全域を襲った。

そう、少女の膝元に倒れていたのは……ずっと探していた愛する妹の姿だったのだ。

デューイは驚く侍女達にリアラの手当てとリアラを湯に入れるように申し付けると、どこかへ行ってしまった。

侍女達は王の支持通りにリアラを風呂場に案内する。

怪我の手当てを先にと言ったのだが、リアラが断ったからだだった。連れて行かれた湯殿は、大国の王の住まう城にしてみればずいぶん小さく、とても質素なものだった。

「知つての通り、我が国の水不足は国一番の問題となっております。それゆえ、王子が民が苦しんでいるのに自分達ばかりがのうのうと水を無駄に使つてはいけないと、このような湯殿をお造りになった

のです。」

侍女が湯かげんを見ながらたんとした口調で話していく。それでも、温められたお湯からはとても良い香りがただよっていた。リアラは血に染まったワンピースを脱ぎ、とりあえずは水で、赤く染まった足を流していく。

手伝うと申し出た侍女は、早々に下がらせた。

まあ、侍女達が心配するのも無理はないだろう。

骨は大丈夫だったもののかなり深い怪我だ。

しかも無理やり槍を引抜いた事もあって、傷はいつそう酷いものとなっていた。

リアラ自身の神気のおかげで早々に血は止まったものの、人間の体そんなに都合良く傷が治るという事は無かった。

しかも治癒の力というのは、人には施せても自分には出来ないのだ。本来の姿であればこんな傷一瞬にして治るのだが……それより、本来の姿のリアラに傷をつける事自体無理なのだが……人間の体のリアラには無理な事であった。

しみ込む痛みを我慢して、水で綺麗に血を流すとリアラは傷の表面を空気の膜で覆った。

こうすれば湯が傷にしみる事もなく、少しは痛みをしのげるだろう。湯につかると、雨に打たれ、冷え切っていた体に熱が伝わる。

湯から香るバニラの甘い香りは、リアラの気持ちを安らげた。

ふと、以前マリーと一緒に風呂に入った事を思い出した。

拾った当初は一人で髪を洗う事も出来なかったマリー。

髪を洗うことを覚えた後はお互い洗いつこなんかをしながらお風呂に入った。

でもしばらく日が経つとマリーは風呂に入るのを嫌がるようになった。

なんでも、水不足で亡くなっていく人達が大勢いるのに自分ばかり

無駄に水を使う事は出来ないという理由からだった。

そんな所はやはり兄弟なんだと、先ほどの侍女の言葉を聞いて思った。

・・・何を言っても風呂に入ろうとしないマリーにリアラは条件をつける事にした。

マリーが水や食料なんかを人々に配る事を許す代わりに最低でも3日に1度は必ず風呂に入る事だった。

人は自分の内にある魔以外にも、外からの魔が取り付き、伝染しやすい生き物だ。

ましてやこの国は魔で溢れかえっている。

いつ魔に飲み込まれ、滅びても良い状態だった。

そんな魔が溢れる貧困区を每晚回ればいくらマリーでもまとわりつく魔に体がおかしくなってしまうだろう。

水には魔を払い、清める力がある。

人が普通毎日風呂に入るのは、体の汗や汚れを落とすことももちろん、その日一日の疲れや魔を清めるものでもあるのだ。

リアラは自分の力で体の汚れを取り払い、身を清める事が出来るから湯につかる必要はない。

けれどマリーにはそんな能力はない。

だから風呂に入るようにさせてただけど・・・

マリーはそんなリアラの気持ちを知ってか知らずか、条件を言い渡されしぶしぶ風呂に入る事を承諾した。

風呂の中ではいろんな話をした。

世界を知らないマリーはリアラの話す世界の話しを、いつも目をキラキラと輝かせながら聞いていた。

いつしか2人は大きくなって小さなお風呂は2人で入るのには狭くなくなってしまったけど、2人はいつも一緒にお風呂に入った。

1人で湯につかるのなんて久しぶりだなあ・・・

足を伸ばし、天井を見上げながら思った。

天界には湯殿なんてものはないから、リアラはたまに地上に降りて山にある人間が来ない温泉なんかに入りに行っていた。

その時はルチアや他の兄弟達、森に住む様々な生き物達も一緒に温泉に入っていた。

リアラは鼻の下までお湯につかる。

狭いと言っても足は十分に伸ばせるくらいの大きさはあるバスタブだ。

ずっと足を折ってギューギューな状態でお風呂に入っていたリアラにとつては、足を伸ばせて入れるお風呂は十分に広いはず……。けれどその広さが今はとても寂しく感じるのだった。

ザバッ

リアラは想いを断ち切るかのように勢いよく立ち上がると、湯殿を後にした。

用意されてあった下着を着け、ローブを羽織り部屋に続く扉を開ける。

すると扉の向こうにはさっきリアラを風呂に案内してくれた侍女が立っていた。

「ご挨拶が遅れて申し訳ございません。

私、今回お世話役を申し使わされました、侍女のサーシャと申します。」

サーシャはそう言って短く挨拶をし、深くおじぎをすると、

「こちらへおかけください。」

と鏡台の前に置かれてあった椅子を引いた。

リアラは無言のまま、言われた通りに引かれた椅子に腰掛ける。サーシャはリアラの髪を乾かそうと、リアラの髪に手を伸ばす。

その時。

「触らないで。」

リアラの冷たい声が部屋の中に響いた。

サーシャは顔を青くして申し訳ございませんと謝る。

「いや……いいんだ。髪は、自分で乾かすから。」

そう言うときサーシャからドライヤーを受け取り自分で髪を乾かしはじめた。

マリーの事は好きでも、リアラの人間嫌いはそのままのようだった。

「キミ、僕の事が怖くないの？」

しばらく経って、リアラは髪を乾かす手を止め、サーシャに問いかけた。

サーシャは18歳くらいの赤茶色の髪をした……とても落ち着いた雰囲気を持つ女性だった。

「はい……いえ、正直最初は驚きましたわ。」

広場で起こった騒動の話も少し入ってきていましたし、……怖がる者達もありました。

不快に思った事でしょう……本当に申し訳ございませんでした。

隣で控えていたサーシャは、柔らかい口調で謝罪した。

「いいんだよ。別に、慣れてるしね。」

リアラはさほども気にしてないような口ぶりで笑う。

「けど、キミは何の躊躇もなく僕の髪に触れようとしたから……」

普通なら、絶対に触れようとは思わないだろう。

「驚いたのは事実ですが、恐ろしいとは思いませんでした。」

それに、デューイ様は、あなた様を丁重にもてなすようにと仰せになりました。

でしたら私は、そのお言葉に従うまでです。」

その目はリアラの翡翠の瞳を真っ直ぐに見つめていた。

全く怖くないという事はないだろう。

この国に根強く残る言い伝えはちよつとやそつとの事じゃない。
じゃなかったらいくら魔物がいたとはいえ、あそこまで騒ぎにはならなかっただろう。

「王子の事、信じてるんだ。」

リアラはサーシャの目を見つめ返し、問いかける。

「はい。デューイ様は素晴らしいお方です。あの方ならば、きっとこの国を良き国へと導いてくださる。

皆、そう信じていますから。」

サーシャはそう言つとニツコリと笑つた。

「そう……それより、さっきは悪かつたね。

僕、人に触られるのあんまり好きじゃないんだ。」

リアラは、ばつの悪そうに答える。

「いいえ、私の方こそ配慮が足らず、申し訳ございませんでした。」

「じゃあ、この話しはもう終わり、僕はリアラ。とりあえずよろしくね。」

リアラが笑つと、サーシャの顔もぱあつと明るくなり、こちらこそ……と頭を下げた。

「ではリアラ様、ドレスをご用意いたしましたのでお着替えになつてくださいませ。」

リアラも頷いて立ち上がり、ドレスの方へと視線を移す。

「まさか、これ着るの?」

そこにあつたのは、真つ青な空色をしたグラデーションが特徴的な裾がふわりと広がつたドレスだった。

「はい。リアラ様は大変お美しい方です。

そしてその美しい白い肌にはこの青が映えるだろうとギルバート様がわざわざ選んで持ってきてくださったんですよ。」

サーシャが自分の事のように嬉しそうにドレスを持ち上げる。

サーシャには悪いが、とてもじゃないけどそんなドレスを着る気に

などなれなかった。

にしても……シエルのやつ。

「ね、お願いなんだけど、そのギルバート様をここに連れてきてもらえるかな？」

僕、こんなドレス着れないよ。」

リアラが頬を引きつらせながら言った。

「ですが……そのお姿では……。」

それに、騒ぎの事やその他の公務でいろいろとお忙しいようでしたし、今すぐお呼びするのは無理かと……。」

サーシャは申し訳なさそうに言う。

確かにローブのままの姿で人の前に出る、ましてやギルのように地位のある人の前になど出れる格好じゃない。

それにギルの仕事は多忙だ。今頃は広場での一件での後始末に追われているだろう。

「サーシャ、実はね……。」

リアラは最後の手段を使う事にした。

本当はすごく不本意だが仕方が無い。

「僕とギルは昔からの知り合いなんだ。それも親密な……。」

ギルは女つたらしだけど、僕はちよつと特別だね。

僕のためにならずぐに来てくれると思うんだよね。」

リアラはわざとギルと愛称で呼び、さも意味ありげに言う。

「それに、本当の事を言うと、あんな事あつて……いろいろと不安で……。」

ギルに会いたいんだ。」

うわぁー口がむずむずするよ。

リアラはどんどん頬がこわばっていくのを隠しながら懸命に言葉を続けた。

「本当は、こんなの良くないって知っているけど……。」

サーシャはまあ、そうでしたの。と、驚いたような表情で言う。
リアラの意味深な発言がサーシャの興味をさそったのだろう。

あと一息だな……

「王子や他の人には絶対秘密だからね。ほら……僕ってこの国にはあまり良いふうに見られてないから。」

僕の事で、ギルに迷惑はかけたくないしね。」

リアラは悲しそうな顔をしてみせる。

「分かりましたわ。リアラ様、大丈夫。私はリアラ様の見方です。

この事は絶対誰にも申しません。」

完全にサーシャは2人の関係が秘密の恋仲なのだと騙されてしまっていた。

「今すぐにギルバート様に取り次いできますね。もちろんこっそりと。」

サーシャがうふふと笑う。

「何か伝える事はございますか？」

本当にノリノリだ。

「うん。『会いたい』それだけ言ってくれば……」

リアラは少し恥じらしいの表情を織り交ぜながら言う。

「分かりました。しかしリアラ様、そのドレスだけは着ていただくなければなりません。」

やっぱりそこは無理だったか……

「分かったよ。じゃあ、自分で着替えるからサーシャはギルに取り次いできてもらえるかな？」

しぶしぶドレスを着る事を承諾する。

ここは城の中。

リアラが良くてもいろいろ決まりがあるのだろう。

サーシャを見送ると、リアラはドレスに着替えた。

割とシンプルな形のドレスではあったが、Aラインのスカートは長く、鎖骨が見えるほど開いた胸元にはキラキラとした小さな宝石が散りばめられていた。

青は青でも、上の方は薄い青で、裾の方にむかつて濃い青が広がっていく……

見事なグラデーションだった。

よく見ると、スカート部分のほうにも同様に、宝石が散りばめられている。

リアラは一通り着替え終わると、椅子に座りながらシエルが来るのを待った。

第8話：憎愛

コンコン

ドアをノックする音が響いたが中からは返事がない。

シエルは呼びにきたサーシャを下がらせると、扉を開けて中に入っていく。

ドアの先には、随分疲れていたのか、リアラが椅子に座ったままの状態で眠っていた。

シエルはそつとリアラに近づいて行く。

そつと頬に触れると、心なしかリアラの表情が和らいだ感じがした。

リアラは一度寝付くとなかなか起きない。

特に今は人間の体……。

リアラの力に体の方が持たないのだろう。

シエルはそつとリアラの体を持ち上げると、傍に配置してあったベツトにリアラを運んだ。

このドレスを送ったのはぶっちゃけ嫌がらせではあったが、リアラになら絶対似合うと思って選んだのだ……。

自分の見立てに満足はするものの、ちょっとやりすぎたかなと反省もする。

リアラの体をベツトに乗せて、自分も横に腰掛けた。

サラサラとした柔らかい髪を撫でながら愛しい存在を見つめる。

リアラの寝顔をこんな真近で見れるのは、許された存在のみだと言う事を彼は知っている。

普通の者は、いくらリアラが人間の姿であっても、リアラの一定距離範囲内に侵入しようものならどんなに深い眠りにいようと、リアラはパツと目覚めてしまう。

だから、その許された存在の中に自分がいると思うと、シエルはとても嬉しく思うのだった。

今の所、リアラの寝ている所に侵入するのを許されているのは、マリーと自分と……ファイ。

リアラのいない8百年という時は……気が遠くなるほど長かった。

それでもシエルが存在してきた長い長い年月から見れば、そんなにたいした事はないのかもしれない……。それでも、長かった。やっと会えて触れる事が出来たのだ。

シエルは、リアラの桜色をした小さな唇にそつと自分の唇を重ねる。リアラからふわつとした甘い香りが漂った。

彼女は……。甘い。

気は強くてどんな時も気丈に、苦しんでいる姿など見られまいと平然を装っている。

だけど彼女がどんなに繊細で、優しい心を持っているのかシエルは知っていた。

触れれば碎けてしまうくらい脆いの……。必死で拳を握り締め、なんでもないと風を笑っている。

知っているのに……

知っているからこそ、シエルはリアラに優しく出来ないでいた。

自分の手に入らないのなら・・・・・・・・・・いつそ壊れてしまえば良いと言っかのように・・・・・・・・・・

そして、リアラの存在が自分の心を締め付ける。

シエルは、自分から出て来ようとする欲望を必死で押さえ、書置きを残すと部屋を後にした。

長かった夜が・・・・・・・・明ける。

しかし、城に残る闇はまだ明けられる事はなく・・・・・・・・時が経つにつれ、深くなっていくのであった。

第9話：4人の初対面

——カツカツカツ

誰かが部屋に近づいて来る気配を感じ、リアラはゆっくりと目を覚ます。

昨晚降り続いた雨は止み、太陽はだいぶ上がっているようだった。カーテンの隙間から眩しい光が差し込んでいる。

ゆっくりと体を起こしたのと同時に、コンコンとドアが叩かれる音が部屋に響いた。

「どうぞ」

短く合図をすると、扉が開かれる。

「おはようございますリアラ様。」

扉の奥からは、ニッコリと笑うサーシャが顔を見せた。

「昨晚はグッスリと眠られたようで。そのまま寝てしまったんですね。」

お召し変えにお伺いしようとは思ったのですが、ギルバート様が、起こさないようにとの仰せだったもので……。」

サーシャはカーテンを開けながら申し訳なさそうに言った。

シエルが来る前に寝ちゃったんだ……。

文句を言っただけだつたのに。

サーシャの会話から、昨晚の事を理解する。

ふとサイドテーブルの方に、メモが置いてあるのが目に付いた。

——親愛なるリーちゃんへ♪

それは、シエルからのメモだった。

メモにしては大層な出だしだが………

ドレスすつごく似合ってたよー。

俺だけその姿見れたからもう満足!!

別の服用意させたからそれに着替えていいよ。

そういえば、俺達って禁断の恋仲なんだって？

リーちゃんってそうゆうのが好きだったんだ。

言ってくれば良かったのに……

でも、可愛いハニーを起こすのは心苦しいから………

愛を語り合うのはまた次の機会にとっておくよ。

それじゃ。

リーちゃんのよだれをぬぐってあげた優しい紳士より……
・・愛をこめて。

あまりの内容に思わず紙を握り潰してしまふ……

それは、朝から気分の悪い内容だった。

とりあえず、シエルの事は頭のスミに寄せて、サーシャが持つてきてくれた服を見る。

それは、白に近いクリーム色の胸元に大きなリボンをあしらった可愛いワンピースだった。

肩の部分は少し丸みがおびてはいるものの、裾が広がるAラインのスカートの長さは膝が半分見えるくらいの丈になっていて丁度良い。

そして、スカートの裾部分には同色のシルク素材の布で縁取られており、シンプルだが、落ち着きすぎていないところが良かった。

あるんなら最初から持つて来いよと言いたくなるところだったが、それは胸の内に留めておく事にした。

ワンピースに着替え、黄土色の膝下くらいの長さのブーツを履く。茶色の丸紐が下から交互に通すタイプのもので、面倒だなとは思ったが、スカートと組み合わせるとバランスはバッチリだった。

顔を洗い、髪を梳かしてサーシャの持つてきてくれた遅めの朝食をとる。

紅茶を飲んでいると再びドアが叩かれる音が耳に届いた。

サーシャがドアを開け、ドアの向こうの人物を確認すると、少し驚いた声をあげ、いそいそお辞儀をしている姿が視界に入った。

ドアの向こうの人物はこの国の王太子、デューイと、その側近2人だった。

リアラはデューイ達の存在には気にも留めず、紅茶をすすする。

そんなリアラの態度にそわそわしていたサーシャを下がらせると、部屋には4人だけが残された。

「昨晚は良く眠れたか？」

デューイが沈黙を破り、声をかけた。

「………おかげさまで。」

リアラは周りに気づかれないように一瞬、鋭い視線をシエルに送りながら答えた。

シエルときたら、その視線を見て見ぬふり………

「で？僕に何か用？」

誰かさんのせいでご機嫌ナナメのリアラは少し冷たくデューイに当たる。

「ああ、昨日の事を聞こうと思ったんだけどね………。」

「何を聞きたいの？」

「あの場にいた魔物を消したのはお前だよな。」

リアラの眉が一瞬ピクッと動く。

「………そうだよ。」

ま、ほんの一部だったけど。ほとんどはマリーが浄化しちゃったみたいだし。」

リアラが簡潔に説明する。

まあ、一番知りたいのは僕が何者かって所なんだろうけどさ………

そこは、企業秘密だよな。

「そうか………」

とにかく、昨日の一件、いくら城を離れていたとはいえ、あそこまで騒ぎが大きくなったのにも関わらず、対応が遅れてしまっていた。申し訳ない。」

それは心からの謝罪だった。

「………いいよ。」

こうなる事は分かっていた事だった。

「まあ、昨日はマリーに救われたね。」

リアラが冷ややかな声で言う。

「そのマリーとか言うのはマリーシュの事だよな？」

「そうだよ。僕が拾った時は記憶を無くしてたから、マリーって名前をつけたんだ。」

なんか偶然だね。」

知っていたからマリーと付けたのに、あたかも初めて聞いたような態度でリアラは言った。

「本当に？聞けば教会に昨日マリーシュを王女だと言って預けたそうじゃないか……。」

あー、そういえばそうだったなー。

たいして気にしたそぶりも見せずリアラは「そうだったけ？」と笑う。

「お前は、騒ぎが起こるのを知っていた。」

デューイが確信を突いてくる。

それに対して、

「そんなの知るわけないじゃん。」

とリアラは笑うが、デューイはごまかそうとするリアラに詰め寄った

「知っていなかったらあんなタイミングで王女を教会に預けたりなんかしないだろ。」

ニヤリとした表情でリアラを見つめる。

………つたくもーうるさいなあ。

「あのねえ、じゃあむしろ仮に知っていたからって何だって言うの？」

デューイの顔が凍りついたように固まった。

「僕はマリーをこの国で一番安全な所に置いてきた。」

それを勝手に抜け出してきたのはマリーだ。

それは僕も誤算だったけど………

そして、マリーを預けて、その後は？

知っていたとして、僕に他に何が出来た？

それをキミに責められる筋合いはないね。

僕を責めたいなら、僕が真実を知っていて、それを説明した時に助けてくれる体勢が出来ている。

貧困区に住む人間の言葉にもきちんと耳を傾けて、それなりの対処をしてくれる警備システムなんかを作ってから言っしてほしいね。」
もつともない分だった。

まあ、デューイはリアラを責めたかったわけではなく、リアラにこまかされている事が気に入らなかったただけなのだったが……リアラもそれは理解していたが、機嫌が悪い上に、あんまりしつこかったものだから、つい意地悪を言ってしまったのだ。

ぶ。

2人の会話を聞いていたシュイが、我慢出来ずに噴出した。

「あははははは。」

お腹をこらえながら笑っている。

ふと見ると、シエルまでもが笑っている始末……

「デューイ、僕等の負けだよ。この話はここで辞めにしよう。」

シュイがデューイの肩にポンと手を置いた。

「いやー、デューイに言われても全然ひるむ様子を見せる所か、反撃してくるとは……」

大したお嬢さんだね。」

シュイが笑いを抑えながら話しかけてきた。

「けど、そこらへんで勘弁してあげてくれないかな。」

そう言っと、ニツコリとした笑顔を向けてきた。

「キミは？」

何年か前に「ムー」として城に来た時に、ちらっと見たことがある顔だと思った。

リアラが問いかけると、シュイは、申し遅れましたと自己紹介を始めた。

「俺はシューイルダ・カルロンドスだよ。昨日はいろいろと大変だったなー。」

シュイは、見た目はのほほんとした感じかと思えばよくしゃべる男だった。

「嬢ちゃんが魔物を何匹か始末してくれたんだろ？ありがと。」

それにしてもすごいな。カルロンドス家以外にも魔法使える人がいたなんて……。」

シュイが関心と興味の視線をリアラに向けた。

カルロンドスと聞いてリアラは納得した。

それにしてもこいつ…….

そうとうな力の持ち主だということが分かる。

それも、以前にも増して。

そういえば……. 水の大精霊が人間と契約したとか…….

シュイからは水の強い気配が感じられた。

こいつだったんだ。

「魔法ね……. ま、キミほどじゃないと思うよ。大魔法師さん。」

リアラがニツコリと笑いかける。

本来なら、リアラのほうがシュイなんかより断然力はあるのだが、人間と自分なんかを比べようとは少しも思っていない、リアラなりの褒め言葉だった。

「俺の事知ってるんだ。」

「こんな可愛いお嬢さんに知ってもらえるとは、光栄だね。」

「あはは、大精霊と契約した人間がいるってウワサは聞いていたからね。」

「そんな事まで……。」

「じゃあ、ウォーティーネにも紹介しないとね。」

「そう言うと、シユイは何やら呪文を唱え始めた。」

「どうやら、大精霊を呼び出すらしい。」

「シユイにしてみたら、面白半分と言ったところだろう……。」

「おい、やめとけって。」

「デューイは急いで止めようとした。」

「気の強いリアラと、同じく気の強いウォーティーネを会わせるのはまずいと思ったのだろう。」

「しかし、デューイが止める間もなく、青い光が辺りを包む。」

「そしてそこから青い髪を輝かせる美しい女性が現れた。」

「まったく、何の用かえ？」

「扇子を口に当てたその女性は、不機嫌そうにシユイに問いかけた。」

「おはよう、ウォーティーネ。」

「シユイはニコニコ笑いながら挨拶をする。」

「デューイは呆れた様子で大人しくソファアに腰をかけた。」

「もう、どうなっても知らないという感じだ。」

「すべてを知っているシエルはただひたすら傍観者に徹していた。」

「もしか、わらわを、用もないのに呼びつけたのか？」

「ウォーティーネの冷たい視線がシユイを睨みつけた。」

「普通の人なら恐怖で震えてしまうその視線を、なんでもないというように受け流すと、リアラを紹介した。」

「いやー、ちよつと会わせたい子がいてさ。」

「リアラに視線を移すと、シユイは話しを続けた。」

「この子が昨日の事件当事者の子だよ。魔法使えるみたいでさ。気」

に入ったから紹介しようと思って。」

そしてもう1度ウォーティーネに視線を戻すと、ウォーティーネは驚いた表情を露にしていた。

「あ……あなた様は……。」

信じられないというふうに、けれど、周りには聞こえるか聞こえないかのような小さな声でウォーティーネは目の前の人物を見つめる。「久しぶりだね、ウォーティーネ。」

ニツコリ笑って、リアラはウォーティーネを見つめる。

そして白い一指し指を、口元に持つていくと、シーっというジェスチャーをし、ウィンクをした。

ウォーティーネの瞳からポロポロと涙の雫が零れ落ちる。

その雫はウォーティーネの頬から離れると、綺麗な結晶となつてこぼれ落ち、床の上に転がった。

それは見たことのない程に綺麗な水の結晶だった。

さすがのシュイもいきなりのウォーティーネの反応についていけず、驚きの表情を隠せずにいた。

それもそのはず、普通なら、大精霊なんてのは人間がお目にかかれる存在ではないのだ。

そして、あの気位の高い女王がこんなになるなんて……何も言えず、ただ2人を見つめるしか出来なかった。

「あはは、ごめんごめん、びっくりさせちゃったかな。」

リアラは立ち上がると、ウォーティーネの傍に行き、優しく涙をぬぐってあげた。

その表情は、本当に柔らかくて、誰もが魅了されてしまうほどの微

笑みだった。

「もう一度お会い出来るなんて・・・光栄です。」

ウォーティーネは頬を少しばかり赤らめながら言った。

最後にウォーティーネに会ったのは人間が誕生する以前の事だった。ウォーティーネが次期の水の大精霊の最終候補にあがった時、ファイの代わりとして、リアラがウォーティーネを大精霊に任命しに地上に降り立ったのだ。

ウォーティーネにとってもリアラはファイと同様、母なる存在。

絶対の信頼と忠誠を誓うお方。

過去から未来へと続く絶対なる君主。

ウォーティーネの立場であつてもそうそうお目にかかれる事なんてない。

気まぐれでリアラが地上に降りた時、会えば良いほうなのだ。

そんなお方が、人間という生物に擬態して、人間達の中で暮らしていたなんて、ウォーティーネには驚きだった。

しかし、それよりも、生きてもう1度目にかかれたという事が何よりも感動してしまったのだ。

『いきなり驚かせてしまったね。』

リアラは神語をウォーティーネに投げかけた。

大地を統べる力を持つ者には皆この力が備わっている。

口で音に出して話すのではなく、意思を頭に直接送るのだ。

特定の存在を絞って話す事も出来るし、大勢に語りかける事も出来る。

特にリアラの神語は威厳に満ちている。

その神語を、今リアラは、ウォーティーネだけに向かって話しかけていた。

周りから見れば、ただ2人が目を合わせているだけにしか見えないだろう……。

『そんな……感激のあまり、取り乱してしまいましたわ。お恥ずかしい。』

ウォーティーネは俯きかげんで頬を染めた。

『それより、貴方様のようなお方が、なぜこの地へ？』

『……ここは始まりの地……この情勢は知ってるよね？』

ウォーティーネは無言で頷く。

『それゆえ、ファイの頼みで見届けに来たのだが……少々問題もあつてね……』

『……そうでしたの。』

しかし事件の当事者って……許せませんわ……

人間程度の存在のくせに、闇に魂を売り渡し、恐れ多くも貴方様を手にかけてうだなんて……

ウォーティーネの怒りが露になる。

『貴方様が手を煩わせる事もございません。わらわがすべて葬つてみせましょう!!』

それほど人間のしようとした事は愚かな事だった。

ウォーティーネの怒りで、花瓶は割れ、窓ガラスには亀裂がはしる。

いきなりのウォーティーネの怒りに、シユイは驚き、それをしずめようと呪文を詠唱し始めた。

その時、

「はい皆さん落ち着いてー。」

よく響く落ち着いた声が、それでも人を適度に威圧させる力ある声が、部屋中に響いた。

その声を聞き、ウォーティーネとシュイの動きがピタリと止まる。

「シュイもウォーティーネちゃんもこんな所で力なんか使わないでくれるかなー。」

お城が壊れちゃうじゃん？」

その声はシエル・・・ギルのものだった。

ウォーティーネはギルが自分と呼んだ呼び方に眉を顰めたが、大人しくしたがつた。

「よい、ウォーティーネ。今の気持ちだけで十分だよ。ありがとう。」

『

リアラがウォーティーネに笑いかける。

「そんな・・・もったいなき言葉。ですが本当によろしいのですかー！？？」

「まあね。ウォーティーネは気にせずシュイに協力してあげるがよい。」

「・・・仰せのままに。」

リアラが許すというのなら、自分はそれに従うまでだった。

「はい、そこもさあ・・・

2人でしゃべらないで皆で話そうよ。」

ギルが2人を手招きする。

ウォーティーネはぎよつとした。

シュイでさえ気づいていない事にこの人間は気づいたのだった。

ウォーティーネは以前から気になっていた事をリアラに訊ねた。

『恐れながら……あの人間は何者です？』

ウォーティーネでさえ見極められないほど、シエルはうまく化けていた。

いや、実在する人間の中にうまく入り込んでいるのだから見極められなくても仕方がない事かもしれないが……

それでも、やっぱり違和感はあるものだった。

ウォーティーネは最初に会った時からこの何とも言えない違和感が気になっていた。

そして、確信を突くように、この男は神語を見破ったのだった。

『うーん。そこはちょっと複雑なんだよね……』

ま、ウォーティーネだし話すけど……あれの中身、シエルなんだ。』

その言葉にウォーティーネの表情が凍りつく。

ウォーティーネにとってシエルはリアラほどとはいかないがそれでもリアラ近い存在。

最上級の敬意をもって接するに値する存在なのだ。

困惑しているウォーティーネにリアラは笑いかける。

『シエルの事は気にしないで……あれは僕の役目だから。

ウォーティーネは何も気にせず自らの役目をまっとうするんだよ？』

有無を言わせぬその視線に、ウォーティーネはただ頷く事しか出来なかった。

『あ、僕とシエルの素性は内緒ね』

リアラはニカッと笑うと3人の方に歩いて行ってしまった。

「嬢ちゃんは……何者だ？」

シユイがいつになく真剣な趣でリアラに問いかけた。

直球勝負のシュイらしい。

しかし、大精霊がここまで敬意を表すなんて普通じゃありえない事だった。

「何者つて、ただの薬売りの美少女だよ。」

リアラは何か問題でも？といった感じで答える。

美少女を付けるあたりがリアラらしい………

「ただの薬売りが大精霊と知り合いなのか？」

「悪い？」

キョトンとした顔でリアラが訊ねる。

悪いわけない。

大精霊を知っていたからって罪になる法律なんてないのだ。

ただ……そういう事を聞きたいのではないのだが………
リアラはシュイの質問をことごとくひらひらとよけていく。

「僕の質問の答えに不満があるなら僕はここを出て行くけど？」

もうこれ以上つまらない質問には答える気はないと言った表情でリアラはシュイを見つめた。

「ふっ。はははは。」

ウォーティーネが2人の様子を見ていきなり笑い出した。

本当なら、我等が母にあんな態度をとる人間達を抹殺してやりたい気持ちにはもちろんあつたが、リアラが許すのであれば、自分は何も出来ない。

それにウォーティーネはウォーティーネで契約者のシュイの事を気に入っていた。

「シュイよ、無駄じゃ。お前ごときが勝てる相手ではない。

それに……このお方にこれ以上無礼を申すというのならいくらお主であつても許さぬぞ？」

この言葉にはデューイも驚いていた。

大精霊がここまで言う相手………

シュイはお手上げという状態で、しぶしぶ承諾した。

「あ、そくだ!!」

いきなりリアラが声を上げる。

「グワシャにね、孫が生まれたんだ、僕も見に行つて来たんだけど、すつごく可愛かったよ。」

将来は立派にかの地を収める器になるだろうね。」

ウォーティーネはまあ、と嬉しそうな声を上げる。

「貴方様にそう言っていただけのでしたら、グワシャ殿も幸せでしょう。」

かの地の未来も安泰ですわ。」

うらやましそうにウォーティーネは言った。

「うん。まだ産まれたばかりだったというのに、力を秘めた良い目をしていたよ。」

「それは、それは……これ以上なき誉れにございますな。私もぜひ会いに行かないと……」

「そうだね、グワシャもきつと喜ぶよ。」

リアラもニツコリ笑う。

「それでは、失礼ではありますが、わらわは先に失礼させていただきます。」

「そつか……あ。そくだ。あいつには気をつけて。あいつすごい女癖わるいから……」

そう言つてウインクすると、脇のほうで何やらむせる声が聞こえた。

「……うふふ。……かしこまりました。」

ウォーティーネは笑いながら頷くと、礼をとり、光の雫とともにパアッと消えていった。

独り

ウォーティーネがいなくなり、再び部屋には4人が残された。

リアラはソファアに座り直すと、すっかり冷めてしまった紅茶をすすする。

「これでやっと静かになったねー。」

ギルも一息つくと、リアラの隣に腰を下ろした。

リアラは無言で新しいカップに紅茶を入れると、隣に座るギルの前に置く。

ギルも何も言わず普通にそれを飲む。

「なあ、お前等って初対面だよなあ？」

2人の様子を見ていたシュイが机を挟んだギルの前の位置にあるソファアに座りながら言ってきた。

「そういえばちゃんと対面するのは今日が初めてだね。」

リアラがギルを見ながら行った。

「ギルバート・ネフューです。以後お見知りおきを。」

そう言ってギルはニーツコリと外用の笑顔を浮かべた。

うわー寒い。

背筋に冷たいものが走るのを感じながらもリアラも笑顔で返す。

「だよなあ……。」

「なんだよ？」

ギルが何か言いたそうなシュイを見る。

「いや……さつき、お嬢がさ、紅茶をギルに入れてやっただろ？」

「うん。」

何かおかしかったか？

「それをギルは何も言わずに自然な動作で飲むからさ……昔からの知り合いだったのかなーなんて思ったりして……」

うわー……。するどいな。

「ぶつ。そんなわけないじゃん。俺、リアラ様に会ったのは昨日が初めてだよ?」

ギルが笑いながら言う。

「いや……。待てよ。」

確かに初めて会った気がしないでもないような……」

おい、どっちなんだよ。

「リアラ様、以前どこかで会いましたか?

もしや、前世は俺達恋人同士だったのかもしれない。」

「初めましてギルバート様。もしや別の人を勘違いしてるんじゃないですか?」

ありったけの嫌味をこめて言う。

「いや……。俺が悪かった。もうよせ。」

シユイが呆れた顔で言ってきた。

「そおか?でも俺はこんな綺麗な女の子ならいつでも大歓迎だよ。」

……。さつきから寒すぎだよシエル。

いつもこんな調子で女の子を口説いているのか。

「それより、キミに聞いてもらいたい事があるんだデューイ。」

リアラは自分の前の位置に座っているデューイを見つめる。

デューイの青の瞳はマリーと同じ色をしていた。

「素性を明かせない人間が頼み事か?」

デューイのその言い方にリアラはちよつとカチンときた。

まあ、確かに素性は明かせないんだけど。

「何?そんなに僕の事が気になるの?」

「城に素性も定かでない人間を置くつもりはないからな……。」
何だよそれ。

「しかし。」

デューイが言葉を続けた。

「お前が、どんな奴だったとしても、お前はマリーシュを助け、マリーシュを家族のように大切に育ててくれた。」

俺は兄として本当に感謝している。ありがとう。」

デューイがリアラの顔を見て初めてちゃんと笑った。

「だから、もうお前がどんな奴で何者かは聞かない。」

「ははは。良いの？僕が大悪党だったらどうするのさ？」

大悪党つてそもそもどんな奴かは知らないけど。

「大丈夫。俺は人を見る目はある方だと思っているから。」

デューイが右目を指差してニヤリを笑う。

「あーあ。泣き虫のアホ王子も言うようになったちゃって。」

「だから、アホ王子って言うな……。」

デューイが少し赤くなっているのは気のせいかな？

「とにかく。お前には当分この城にいてもらう。」

「は？何で？」

「お前はこの国の行く末を見届ける義務がある。」

そういえば……デューイ、以前僕に誓ったんだっけな。

真名まで出しちゃってさ。

「……分かったよ。ただし、条件がある……！」

「なに？」

「ドレスは絶対着たくない。スカートは膝丈より下の長さは嫌……！」

「……そんなに良いのか？」

「うん。とりあえずはそれで。」

リアラはよほどドレスが気に食わなかったのか、ギルの方をチロツと見ながら頷いた。

「つーかさあ、こっちの2人こそ前からの知り合いだったわけ？」

シユイがニヤニヤしながら聞いてきた。

「ああ、昔このアホ王子がびーびー泣いている所、助けてあげたんだ。」

仕方ないから簡潔に説明してやった。

「お前な………もつと他に言いようつてもんがあるだろ。」

「何言ってるの？」

本当の事じゃん。そんなに恥ずかしい事でもないでしょ。」

「いや、男のプライドつてもんが………」

デューイは何やらごによごに言っている。

「僕に言わせたら、プライドなんてあったのかつて感じただけだね。一応覚えておくよ。デューイはプライドの高い男だつて。」

僕の言葉にデューイは絶句し、シユイは大笑いしている。

「リアラ様あまり王子を苛めるのはやめて下さい。」

シエルがニコツと笑う。

目が………笑ってないよ。

「………分かったよ。」

仕方ないなあ。

「ところで、さっきデューイ様に言いかけた頼みっていうのはなんなんですか？」

お、忘れてた。

ナイスだねシエル。

「うーん。ちよつと大巫女に話があるんだよね。」

リアラが大巫女の話しを切り出すと、周りがいきなり静かになった。

「聞いた話しじゃ、16年ほど前から床に伏せってるんでしょ？」

「何故その事を知っている。」

デューイが低い声で聞いてきた。

この国じゃ、その話しは一部の上層部しか知らないトップシークレッツらしい。

まあ、国が傾いているこのごじせい、民達はもう、神に祈るしかない。

いのだろう。

神を心の支えにして、救われる者も大勢いるのだ。

その中で大巫女までもが床に伏せっていると民に知られてもしたら、本当にこの国は混乱してしまう。

王がどうしようもない今、頼みの綱は大巫女しかないのだ……その事もあつてか、大巫女に関する話しは、皆敏感だった。

「何故？何故って言われてもねえ……知っているから仕方が無い。誰？と聞かれても答えようがないね。」

デューイはリアラにその質問を向ける事は無駄だと理解したのか、別の問いを投げかけてきた。

「じゃあ、質問を変える。どうして大巫女に会いたい？」

「そうだね……僕は、いろいろ知っているから、会って話しがしたいんだよ。」

それに、大丈夫。会わせて良かったって後で思うから。

「……今言えるのはこんくらいかな。」

リアラがニツコリと笑う。

デューイは、リアラの瞳を見つめ、黙っていたが、しばらくして、「分かった。すぐにといいのは無理だが、必ず謁見の手はずは整えよう。」

と約束してくれた。

そして、他に会話をすることもなく、2人を連れて仕事へと戻って行ってしまった。

——
夕刻

日が傾き始め、空が赤く色づいてきた頃。

暇をもてあましていたリアラは、気分転換に庭を歩いていた。

深刻な水不足が問題のルージスタイン王国では、花さえも枯れ、王城の庭だというのに、荒れ放題だった。

きつと、デューイが水を無駄に使う事は許さなかったのだろう。

しかし、どこからか花の香りがする事に気づいた。

・ ・ ・ ・ ・ 薔薇の香り ・ ・ ・ ?

リアラは香りのする方へと足を進める。

城は荒れていると言っても、とても広かった。

本来は水で溢れているはずの噴水も、水路も干上がってはいいたけれど・・・

きつと昔は美しい花の園だったと思わせる作り。

今は草が荒ていて迷路のようだが・・・

入り組んだ庭を、花の香りだけを頼りに突き進む。

15分ほど歩いただろうか、リアラの前に薔薇で出来た門のようなアーチが見えた。

アーチの中を潜ると・・・

あたりには1面薔薇の花。

・ ・ ・そこだけが別世界だった。

薔薇のみで飾られた場所。

そこには、色とりどりの薔薇が咲き、美しい世界を奏でていた。

「あら、お客さん？」

いきなりかけられたその声にびっくりして勢い良く振り向いてしま
う。

するとそこには、蜜色の髪をした青い瞳の美しい女性が立っていた。

気配がなかった。 ・ ・ ・。

こんなに近くまで人が来ていたのに気づかなかったなんて。
多少驚いたものの、すぐ気を取り直し、女性に目をやる。

目の前で少女のように笑う女性は、不健康なまでにやせ衰えていた。
しかし、ニコニコとしながら薔薇を愛でている。

似ている。 ・ ・ ・。

僕の大好きだったあの子に。 ・ ・ ・。

「あなたは。 ・ ・ ・？」

リアラは女性に問いかけた。

「私？わたしは。 ・ ・ ・。分らない。でも皆、マリーシェ
って呼ぶわ。」

うふふつと笑いながらマリーシェはヒラヒラとドレスをなびかせな
がら歩く。

「変よね？私は私なのに。でも今日は女の子のお客さん。嬉しいな。」「いっつもはね、男のお客さんなの。」

よほど嬉しかったのか、マリーシェはくるくると回りながら子供のようにはしゃいでいた。

そして、ふと動きを止めたかと思うと、リアラの方をじっと見つめる。

「うふふ．．．あなたとっても綺麗ね。」

その瞳は、リアラを見ているようで．．．どこかとても虚ろだった。

ああ．．．この人間の心はもうここにはないのだな．．．．．。

もう、壊れてしまっているんだな．．．．．。

それでも、少女のように笑うその人は、好きだったマリーにそっくりだった。

「マリーシェ様、マリーシェ様ー!!」

遠くでマリーシェを呼ぶ声が響いた。

「ああ．．．もう呼ばれちゃった。あね、私お家を抜け出して来たの。」

この場所は、秘密の場所なの．．．．だから、内緒ね。」

最後にニツコリと笑うとマリーシェは声のした方へと走って行ってしまった。

リアラは傍に咲く薔薇を優しく撫でる。

ここの薔薇は、誰かの思いが沢山つまっていた。

「あれは……。」

後ろから声が聞こえる。

その声に対しては、驚く事はなかった。

「キミの母親だね？デューイ。」

デューイが遠くで見ていた事は知っていた。

マリーシェが男のお客さんと言ったのは、デューイの事だったのだろう。

リアラはデューイの目の前にあった台に腰掛けた。

デューイの目線と丁度おなじ高さになる。

「……ああ。」

デューイがマリーシェの走って行った方向を見つめながら答えた。

「左目を刺した俺を見て、母様は発狂し、東塔で起こった惨劇を聞いて、マリーシェが行方不明だと聞いて、母様は壊れた。」

デューイの苦しそうな横顔をリアラはただ見つめる。

「そしてある日、母様は……事の発端だった正妃を殺したんだ。」

その後の事は聞かなくても安易に想像出来た。

国王はその事実をもみ消し、マリーシェは自分に降りかかった悲しみや罪に耐え切れず……壊れてしまったのだ。

かつての自分を思い浮かべる。

かつてリアラも壊れかけてしまった事があった。

しかし、差し伸べられた手によって救われたのだ。

狂い狂った国。

城の中では日々が殺し合い。
城の外でも人々は殺しあう。

16年前・・・・・・・・・・そう、デューイが生まれた日からその悲劇は始まった。

人は皆殺しあった。・・・・・・・・自らが生きるために。

そして、自分も・・・・・・・・母までもが・・・・

「人間とは・・・・・・・・脆いよな。」

一瞬俯いてそう言つと、デューイはふわりと笑った。

リアラはデューイの頬にそつと手を置いた。
柔らかく、優しく。

青い瞳が驚いたようにリアラを捉える。

「苦しいか？・・・悲しいのか？」

リアラの瞳に見つめられ、デューイの心は揺れた。

「・・・分からない。」

この世は地獄だった・・・けれど、そこで生き抜くと決めた。
それなのに、今、リアラに見つめられ、苦しいのかと聞かれ・・・
・デューイは分からなくなってしまっていた。
自分は悔いているのだろうか？

頬が熱い。

触れられた手はとても冷たいはずなのに、その部分だけが妙に熱をもっていた。

リアラは、真っ直ぐに伸びるデューイ自身を見つめる。

それはデューイの中にある信念のようなもので、それでも、はりつめている糸は・・・とても細くて・・・

今にも切れてしまいそうで・・・。

それを繋ぎとめるかのように、思わずデューイの頬に自らの手を重ねてしまっていた。

「なぜそんな顔をする．．．僕はデューイがなんでそんな表情かおをしているのか全然分からないよ。

相変わらず泣き虫のアホ王子だね。」

リアラはデューイを見つめながら静かに笑った。

「僕は、デューイの親がどうなるつか、この国がどうなるつか．．．
．．正直どうでもいい．．．．でもね。」

リアラは天界にいる大切な存在を思い浮かべる．．．

「独りが、寒い、事だっくらい、僕にも分かるよ。」

そんなリアラの笑顔は柔らかくて、優しくて．．．．．そしてとてつもない哀しみを帯びていた。

その顔を見た瞬間、デューイは崩れるようにリアラを抱きしめた。

涙は出なかった。

けれど、いろんな想いが重なって．．．．

それでも、リアラの言葉が笑顔があまりにも優しくて．．．．

デューイは、王になるために様々な下積みをする必要があった。
助けようと思えば助けられる事も出来た人達。

それでも、汚れきった城内を一掃するためには証拠を押さえるだけ
押さえ、見てみぬふりをする必要があった。

母親でさえも．．．．見捨てた。

母親を王から引き離す事くらいは、成長したデューイにとってはたやすい事だった。

しかし、今王から母親を引き離したら、何もかもが駄目になってしまふ。

王は、記憶を無くし、少女の様に微笑むマリーシェをこれ以上ないまでに愛した。

もう、デューイにとにかく言う事もあまりなくなっていた。

それは、デューイにとっても有難かったし、動きやすかった。

マリーシェは、どんどん衰えていったが、デューイは助ける事はしなかった。

けれど、この庭だけは水不足であつたにもかかわらず維持し続けた。それは、マリーシェに対する罪悪感からきたものだったのか……

デューイはそうやって着々と王へと続く道を登り続けていた。

そしてもう少しで16になる。

しかし、高みに登るにつれてデューイはどんどんと孤独になっていた。

そう、寒いのだ……温まる事のない心。

独りは、寒かった。

そして、自分は独りだと知る……それはとてつもない闇だった。

暗闇の中、独りになるとふと思う。

周りからの敵意の目、親からも存在自体を忘れられ……

自分はここにいいのか？

どこに行けばいいのか？

朝になるとギルが来て、毎日変わらない笑顔で起こしてくれた。

「デューイ様」朝日とともにそう呼ばれ、安堵する。

まだ自分はここに存在する事に……………

そして昔を思い出す。

皆が笑っていたあのひと時を。

過去に戻りたかったわけじゃない。

ただ、ふと思ってしまう。

親にすら存在を忘れられてしまった俺は、本当は必要とされていないんじゃないかって……………

昔から抱いていた小さな想い。

俺は……………ココニイル？

チャントイル？

「………いいんだよ。」

耳元で、凜と輝く少女の声が響いた。

たった一言だったけどその声は……どこまでも真っ直ぐにデューイのなかに響いていった。

「ありがとう。」

体を離し、リアラの瞳を見つめ、ニッコリと笑う。

‘ここにいていいんだよ’

その一言が、なぜかとても切なくて、嬉しかった。
赦された気がした。

存在することを……

沢山の、数え切れないほどの犠牲の上に立つ自分。

俺は独りだ。

上に立つとはそういう事で、それは一生変わる事はないだろう。
死ぬまで独りなのだ。

それは消える事のない、赦される事のない罪を……背負って
いくと決めたから。

それでも、一人じゃない。

ずっとギルが隣にいてくれた。

今は、シユイだっている。

それに、キミがいる。

デューイの笑った顔を見つめると、リアラはデューイのおでこをピ
ンっとはねた。

「いってー。何すんだよ。」

デューイが痛そうにおでこを押さえながらリアラを睨む。

「あーあ、やっぱりキミは泣き虫のアホ王子だね。」

リアラがため息をつきながら言った。

「だから、何だよそれ。」

俺泣いてねーじゃん。」

デューイのその表情は、いつもの冷酷冷静なデューイではなく、も
うすぐ16歳と少年っぽさが残る笑顔だった。

リアラの前では、‘大国を治めるにふさわしい立派な王子’ではな
く、一人の‘15歳の泣き虫なアホ王子’になれるのだった。

その事に今更気づき、でもそんな自分も悪くないと笑うことが出来

る。

「キミはさあ、優し過ぎるんだよ。」

「は？」

デューイはリアラの言う「優しい」の意味が分らず思わずぽかんとしてしまう。

「優しいから、心が痛む。」

そう、こんなにも苦しいのはデューイの心が優しいから。

「まあ、優しさは心のなかにしか持っていないのはつらい事なんだがな……。」

現実が違うから……

「ほら！―いつまで呆けた顔をしている。情けないぞ。男ならドンと構えろ。」

リアラがバシバシとデューイの肩を叩きながら言うてくる。

「あのなあ……言うておくけど、お前は男っぽすぎるんだよ。」
まったくこの女は、人の中にずけずけと……

「ずっと思ってたんだけど、その男口調から直したらどうだ？」

少しはマリーシュを見習え。あの子は多少元気は良いが、王女にふさわしく気品あふれる淑女だったろう？」

デューイも負けずと言い返す。

「何言ってるんだ？」

マリーは僕に負けず劣らずの気の持ち主だったぞ？」

リアラはきょとんとした顔で言い放つ。

「は？」

デューイの中にいるマリーシュはぬいぐるみとか人形遊びが大好きな、いかにも女の子って感じの妹だった。

「この僕自ら護身術や剣を教えたんだ。そこらへんの男より腕っ節は良かったぞ？」

それに廊下はどたどた走るし声は大きいしよくしゃべるし、負けず嫌いでその上頑固ときた。

まあ、確かに、マリーはこの女より可愛いくて、心の清らかな女の子だったがな……」

リアラの話すデューイの中のマリーシュとは大分違いすぎていて話しについていけない。

「ああ、そうそう。」

僕の作る材料には、たまーに珍しい昆虫や爬虫類なんかも使ったけどね。マリーはその昆虫集めも得意だったな。」

リアラは森にマリーと出かけた時の事を思い出した。

流石に殺すところは見せられなかったけど……。

「どんな育て方をしたんだ。」

デューイはもうやめてくれといわんばかりの様子。

「普通だよ普通。」

そうだ、デューイにも剣の稽古つけてあげようか？

見るからにひ弱そうだなもんな。

まあ、ギルには勝てる気がしないけど……。」

「何言ってるんだよ。」

ギルは確かに強いけど、俺と大して差はないぜ？ たまに勝つ事もあるし……。」

「そうなのか？」

シエルの奴、かなり手ぬいて戦ってるんだな。

「まあいいや。城にいても暇だから剣の稽古は僕がやってあげるよ。仕事とは別に軍のほうで指揮をとったり剣の練習をしたりしてるんだろ？」

まあ、それも仕事の内なんだろうけど……。」

なんでそんな事知ってるんだ？ と疑問に思ったが、聞くだけ無駄だということデューイは知っている。

「ああ、でもお前、俺の事甘く見すぎてないか？」

デューイが不満げな顔をして言い放つ。

剣には自身があつたし、ましてや自分より小さく腕だつてこんなに細い女の子に負ける気なんてしなかった。

「見てない見てない。」

けど、キミはいつまでたつても泣き虫アホ王子だから……僕が鍛えてあげようと思ってね。」

リアラが笑う。

「ったく……まあ、それでいいよ。」

確かにリアラの前ではそうなのかもしれない。

「でも、」

デューイはリアラの顔をじつと見つめる。

「でも？」

「俺が勝つたら、女の子っぽくふるまってもらうからな。」

それがリアラが一番嫌がる事だと思って言ってみた。

「は？僕のどこが女の子じゃないって言うんだよ。」

こんなに可愛いくて愛らしい女の子つつたらそうそういるもんじやないぞ？

あ、マリーは別格な。

それに、知識も豊富で薬売りなんてオプションも付いている。

こんな才色兼備の僕のどこが不満だっというんだよ。」

「お前な……そんな事自分で言うか？」

それに薬売りなんていうオプションは女の子らしいには必要ないと思うぞ？」

無駄だと思ったが、今回は一応言うだけ言ってみた。

きつと言った所で理解なんかしてもらえはしないだろうが。

確かにリアラの言う事に嘘はない、分かるけど、こうハッキリと自分の事を良く言えるものだろうか……

しかも微妙にズレているし。

まあ、ここまで自分を褒めるといった行為はいつそいさぎよく、あ

まり嫌味には聞こえないのだが……

「オプシヨンはあればあるだけ得だと思っていたのだが……
やっぱりあれか？」

女の子らしいというのは、床が上手いという事なのか？」

リアラが真面目な顔で聞いてくる。

「は？」

「いや……だから、人間で言う男女の営み……夜の
相手という事だ。」

これはある奴限定だと思っていたのだが。」

リアラの言うある奴というのはもちろんシエルの事だった。

「ぶつ。」

真剣な顔で言ってくるリアラを見て、デューイが思わず吹きだした。

「男女の営みって……大丈夫、誰もそんなの求めてねーよ。」

しかも、その胸じゃーな。

お前みたいなのを好むなんて相当な物好きだけだよ。」

デューイが笑いながら言ってくる。

「キミ、分かってないなあ。胸なんて邪魔なだけじゃないか。」

まあ、僕を好むのは相当なもの好きってのはよく分かるよ。

この国じゃ、僕は‘異形’だからね。

でもさ、そんな異形付きを城に置いてるんだから、僕から言わせたらキミも相当な物好きだとは思うけど？」

じつとデューイを見ながらケラケラとリアラは笑う。

物好き……か。

そうかもしれないな。

面白そうに笑うリアラを見ながらデューイは思う。

気が強くて、偉そうで、人の中にはずけずけと入って来るくせに、
自分の前にはちゃんと線を引いている。

自分の事は一切話さない謎の少女。

最初はそれがなんだか腹ただしかった。
けど、今はそんな事どうでも良かった。

ただ、この少女に惹かれていたんだと納得できる。

こんな気が強くて、自己的で、いつも挑戦的な目で俺を見つめる女。
人に弱みを絶対見せない。

痛くても平気な顔でニヤつと笑う。・・・美しい女。残酷な女。
それでも、どこか優しくて・・・

そしてこいつも俺と同じ。

自分は独りなのだという事を知っている。

「まあ、いや。

キミが勝つたらなんでも1つ言うこと聞いてあげるよ。

女の子っぽくでもしてあげるし、どんな質問にでも答えてあげる。」

リアラのくりつとした翡翠の瞳が月明かりに反射してキラキラと輝いた。

「楽しみにしてるよ、アホ王子。」

デューイの耳元でリアラが囁いた。

ひらつと少女が台から降りる。

薔薇の香りとはまた違う、バニラのような香りがふわっとデューイの鼻をくすぐった。

あたりはもう日はとくに落ちて、星と月だけが2人を照らす。

最後にもう1度ニヤつと笑うと、リアラはもと来た道を引き返して行った。

デューイだけが、抑える心臓を我慢出来ずその場にたたずんでいた。

そして振り返り、駆けて行く少女の後ろ姿をただまっただけ見つめる。
漆黒の真っ直ぐな髪が少女の心の深さを表しているようにみえた。

今はただ・ ・ ・ ・ ・あの子が愛おしい。

その気持ちに驚く事もなく、デューイは、去っていく彼女を見つめ続けた。

黄色い薔薇の花言葉

リアラはいつになく上機嫌で部屋に着くと、明かりをつける事なく窓辺行き、星でも眺めようと窓を開けようとした。

「なにか楽しい事でもあったの？」

後ろからぞつとするような低い声が聞こえた。
振り向く間もなくギュツと体を抱きしめられる。

「もー。俺が部屋にいたのに全然気づかないんだもん。」

次に振ってきた声はいつものシエルの声だった。

茶色の髪に濃い茶色の瞳。

大人の男を思わせる整った顔立ち。

優しいような顔。

それらの顔はシエルのもではなくギルの顔だ。

けれど、2人で話すときの声だけはギルではなく、シエルの声となるのだった。

「何かあったの？」

リアラが問いかけた。

するとシエルはリアラの髪に花を挿した。

「プレゼント。」

「何これ……花？」

リアラは髪につけられた花を取って見上げる。

それは、見事な薔薇だった。

綺麗に咲いた黄色い薔薇。

ちくつ。

薔薇についた棘がリアラの指に刺さる。

白く、細い指から真っ赤な血がつつつと流れた。

取り忘れたのだろうか……薔薇には1本しか棘は付いていなかった。

「ああ、刺さっちゃったね。」

シエルがリアラの手を取ると、流れた血を下から舐めあげた。

そして、棘が刺さった部分の指を口でくわえる。

「なに？どうしたの？」

リアラはシエルの方へ向き直り、問いかけた。

なんだかいつもと違う。

「楽しいそうに話してたよね。」

明日の約束までしちゃってさ。俺もまぜてよ。

俺がりーちゃんに勝ったら、何聞いてもらおっかなー」

シエルがニコニコと笑う。

その時、シエルからもらった薔薇が目に入った。

黄色い薔薇は珍しい。

今咲いているとしたら……

リアラは今日の出来事を思い浮かべる。

「聞いてたの？」

リアラがじつとシエルを見つめる。

「ずいぶん楽しそうだったねー。」

シエルは悪びれる様子もなくニッコリと笑った。

「デューイの事好きなの？」

「・・・・・・何言って・・・・・・」

「人間に触れられるのが嫌いなリーちゃん、自分からデューイに触れたんだ。」

どうやらシエルは一部始終を見ていたらしい・・・・・・

「盗み聞きなんて趣味悪いね。」

「ごめんねー。たまたま聞こえちゃったんだ。」

しれーつとした態度でシエルは言い放つ。

絶対に悪いなんて思ってもいないし、たまたまなんてのもありえない。

「で？デューイと話してたからってそんなに怒っているの？」

リアラの冷たくなった手が、シエルの頬をなぞった。

「怒ってなんかないよ？」

「じゃあ、どうして、そんなに泣きそうな顔してるの？」

分からないよ。言ってくんなきゃ分からない事だってあるだろう？」

シエルが壊れてしまいそうで怖いんだよ。

「分からない？じゃあ、教えてあげるよ。」

そう言つとシエルは、頬に触れたリアラ手を掴むとそのまま歩き出し、乱暴にベッドへと押し倒した。

「ちよっ。」

ベッドに倒されたりアラはいきなりの事についていけず、思わずシエルを睨む。

「何すんのさ。」

起き上がろうとしたリアラを押さえ込むようにシエルが上に乗る。

「どうしちゃったの？」

今日のシエルはなんだかおかしいよ。

「俺は……800年待った……。」

シエルの消えそうな声がリアラの耳に響く。

「……やっと触れることが出来たんだよ。」

シエルが潤んだ瞳でリアラを見つた。

シエルの声に心臓の音が高鳴った。

「じゃあ、どうして昨日みたいな、なんで……？」

ずっとためこんでいた想いをシエルにぶつける。

シエルの指はリアラの頬を撫でる。

「シエルが洩らしたんでしょ？魔物達に。」

「そうだよ。」

残酷な響きが部屋中に響いた。

「ど……して？」

知ってたけど、聞きたくなかった答え。

やっぱり僕の事、憎んでるの？

「マリーの事は、本当に予定外だったんだ。」

シエルはリアラの首筋に顔をうずめる。

「んっ。」

リアラからわずかに声を漏らす。

「俺は、何も変わらない。ずっとずっと君だけを見てきたよ。」

シエルが胸元にあるリボンを解いた。

リアラの白い胸元が露になっていく。

「それなのに、リーちゃんはデューイにあんな笑顔を……。」

「や……め、て。」

リアラが細い声で言った。

「俺の予定ではさ、リーちゃんがもつと人間を嫌いになればいいって思ったんだ。」

あそこにいる奴等全部消し去って、もつともつと憎めばいいと思うたんだよ。

だから、マリーの事は予定外だったんだ。

俺は、リーちゃんの頼みならなんでも聞くよ？

一緒に世界なんか消しちゃうおうよ。昔みたいになさ。」

クククつと愉快そうにシエルが笑った。

そしてニヤリと笑うと、シエルは一気にリアラのワンピースを上から引き裂いたのだ。

「リーちゃんは俺のものだ。」

「……………」

「誰にも渡さない。」

シエルの片手がリアラの両手を頭の上で押さえ込む。

そして、もう片方の手がリアラの太ももをつーっとなぞった。

「あつ。」

リアラの体がびくつと反応する。

その反応を楽しむかのように、シエルの口から冷たい笑い声が漏れてくる。

「ほんと……可愛いね。人間の体はどう？気持ちいい？」

シエルの唇がリアラの唇と重なる。

「んっんー。」

ぬるつとしたシエルの舌がリアラの中に入ってきて、リアラの口のなかをもてあそぶ。

絡まれた舌が執拗にリアラの口内を責めたてた。

リアラの口の端からは飲み込めなかった唾液が零れる。

シエルは、一度唇を離し、リアラのすべてを飲み込むように、口端から零れた唾液を舐め取った。

「クスクス。ほんとリーちゃんは美味しいよ。ずっと君がほしくて

たまらなかった。」

シエルの愛撫はどんどん激しさを増していく。

「あつ……やめ、ろつ。」

リアラが擦れる声を必死にあげて抵抗する。

言葉では拒絶していても、体は反応している事にシエルは気づいていた。

そしてその反応がシエルの残虐さを駆り立てる。

リアラの潤んだ瞳が、近づけば近づくほど香ってくるリアラの甘い香りが、シエルの理性をことごとく壊していった。

太ももをなぞっていたシエルの指が、リアラの大切な所に触れる。ビクつとリアラの体がビクつと震えた。

「んあつ。」

何かなんだか分からず、いそいでシエルから逃れようと、手を動かすが、シエルはびくともしない。

口から出てくる声だけを抑えようと、必死で我慢しているリアラ。もつと声を聞きたくて、リアラの中に入れる指を2本と増やしていく。

「あつ……シエ、ル。」

溢れ出る液体のくちゅくちゅという音が部屋の中に響いた。

「こんなにしちゃって、俺の体忘れないでいてくれたの？」

笑っているけど、笑っていない冷たい視線がリアラを突き刺した。

シエルの舌が首筋を滑り落ち、鎖骨辿り、膨らみに登っていく。

そしてその頂上にたどり着くと、桃色に膨張した突起部分をカリつと噛んで、リアラに新たな甘い刺激を与えた。

「んつ。……んはあつ。」

シエルが与える感覚にリアラは必死に堪えはするも、心とは逆にその体は付いていけず、瞳は潤み、頬は薔薇色に紅潮し、声もかすれている。

絶頂を向かえようとしているのに、シエルの指がそれを赦さない。
わざとポイントを避けられて、バラバラに動く指。

「リアラ．．．可愛いよ。ここもピンク色に膨らんで。」

シエルは妖艶な笑みを浮かべながら舌で指でリアラの感じる所すべてを弄ぶ。

「もつと俺を感じて．．．顔とか、肌とか、そんなのは覚えなくていい．．．」

ただ、俺の中身を感じてくれればいいんだ。俺そのものを．．．
「」

シエルはリアラをかき乱す指を増やす。

もうすでにリアラの感じているポイントは知っている。

そこを執拗に攻め、舌はリアラの体を這いずり回った。

「ああんっ．．．．．イヤだ．．．こん、なの．．．
ダメ、やめろ．．．．．僕．．．」

迫りくる波を感じ、リアラは怯えた瞳でシエルを見つめた。

リアラの甘い香りを嗅ぐと、その翡翠の瞳で見つめられると、とたんに理性が働かなくなる。

自分の手に入らないというならば、全部全部壊れてしまえばいいとさえ思ってしまう。

本当は、誰よりも大切な存在なのに．．．

だから、どんな犠牲を払っても、もう1度リアラに触れたかった。

柔らかな髪に、意思の強い真っ直ぐな瞳に、ピンク色したの小さな唇に、白い首筋に、リアラのすべてにもう1度触れてキスをして．
．．．

自分だけのものとして傍にいてほしかった。

叶わぬ夢だと知っていても……

リアラは誰のものにもならない。

そしてリアラの1番はどんなに頑張っても自分ではない事も知っている。

それならば、自分の手の届かない所に行ってしまうなら……
・いつそ。

壊れちゃえ。

シエルは荒々しく自分の唇をリアラの唇に押し当てると、リアラを責めていた指を勢いよく引抜き、シエル自身で一気にリアラを貫いた。

「んーーーーー!!」

悲鳴にも似た声とともにリアラの中になにかが走る。

そのとたん、リアラの手から力が抜けた。

「くっ。」

絶頂を迎えたリアラ自身が、シエルのものをキュウっとしめつけ、リアラの中から甘い香りを放つ蜜を放出溢れさせた。

その感覚に、シエル自身も耐え切れず、欲望を一気にリアラの中に

流し込む。

シエルはゆっくりとリアラから唇を離す。

「感じやすすぎだよ……リーちゃん。」

不適な笑いをうかべリアラを見下ろした。

「甘いよねリーちゃんは……全部。」

指についたリアラの蜜を舐めとり、軽くリアラの脛にキスを落とす。

「何……を。」

リアラのかすれた声がシエルの心を震わせる。

デューイに抱きしめられている姿を見たとき、そしてリアラがそれを優しく受け止めている事に気づいたとき……

押さえ込んでいた想いが爆発した。

どうして……どうして……

自分はリアラに触れるまで800年もかったというのに。

どうしてデューイは……

何の躊躇もなくリアラに触れるデューイを殺してやりたい気持ちになつた。

しかしそれ以上に、自分以外存在を受け入れ、触れさせているリアラにこれ以上ないくらいの嫉妬心がつつた。

愛しい愛しい可愛いリアラ……

「でもね、まだだーめ。」

シエルはまだ呼吸すら満足に出来ていないリアラに、冷やかな視線を送る、クスリと笑うと、リアラの中ですぐに大きくなった自分をさらに奥へと押し当てた。

「ああっ!!」

愚かだとは分かっている。

それでも募る嫉妬心、焦り、欲望は抑える事はできなくて、囁かれる声は罵倒に変わる。

そして、シエルの中にある暗い感情をぶつけるかのように乱暴にリ

アラを突き上げる。

「やめてほしくなんかなくせに」

喉の奥で低く笑い、シエルはリアラを突き上げるスピードを速めた。

めちゃくちゃにしてやりたかった。

もう、誰かに触れさせるなんてリアラが思わなくらいに……

2人はどんどん底へと落ちていった。

「どーして……なんですか？こんな事。」

やっとシエルから開放され、必死で呼吸しながらもリアラはシエルの瞳を見つめる。

「リーちゃんは俺のもの。頭先从足先、髪の毛の1本1本……

・全部俺のなんだよ。」

リアラの瞳が揺れる。

「大好きだよ。全部壊れてしまえば良いと思うほどに……
ね。」

なんて不器用なんだろう。

大好きなシエル。

どんな事をされても、君を嫌いになんてなれないよ。

ただ、一緒にいたかった。

それだけなのに………

心ってのはやっかいだ。

リアラは真っ直ぐにシエルを見つめ、すべてを分かっているかのよう
にニッコリと笑いかける。

そして、そんなリアラに一瞬見入ってしまったシエルの隙をつき、
シエルの手を掴んで引き寄せた。

不意をつかれ、シエルはベットに倒れこみ、入れ違いにリアラはシ
エルの上に馬乗りの状態になる。

「あらー、俺押し倒すほうが好きなんだけどなー。

でも、女の子に押し倒されるの嫌いじゃないかも。」

「ふざけないで。」

リアラがぴしゃりと言い放つ。

「僕の体は僕のもんだよ。」

頭の前から足の先まで、僕は僕のものなんだ。

リアラがシエルの胸を叩く。

「赦さない………赦さない。」

ドンドンとシエルの胸を叩く。

まだ幼かったマリーの笑顔を思い返す……。

マリーに僕の情報を洩らしたのはシエルだった。

話を聞いたマリーは急いで僕の所まで走って来た。

シエルの予定外っていうのは、マリーが死ぬって事くらいだったの
だろう。

マリーが騒ぎを止めて、神気を使って広場を浄化するのも計算ずく
だった。

大方、そうしないと僕が消滅するとか何とかって吹き込んだのだ
ろう。

実際にマリーには大きな危険があったわけだし、マリーが死のうが
シエルにはどっちでも良かったって事だ。

僕が助けると思って、マリーは死なないだろうくらいにしか考えて
いなかった。

ギルの体を器にしたのだって……。

「憎んでいいよ。」

シエルが笑った。

「どーしてシエルはそうなの？」

壊したって何も生まれえない。本当は、本当は誰より優しいくせに！

！

知っている。

僕のせいだって。

僕だって、何よりもシエルが大好きだよ。

誰よりも優しかったシエル。

大地に根付く生命を愛していたシエル。

そして僕を愛してくれていた……シエル。

僕もシエルが大好きだった。

……今でも。

そのシエルからすべてを奪ったのは……僕だ。

リアラは自分の震える唇をシエルに押し当てた。

シエルは最初びっくりした様子だったが、やがてリアラをゆっくりと受け入れた。

深い闇があつた。

それは、2人は、もう戻れない事を知っていた。

それでも追いかけてしまうのだろう。

幸せと呼べたあの穏やかな日々を・・・・・・・・・・
求め、追わずにはいられなかった。

たとえそれがどんな犠牲を伴おうとも。

剣の稽古

翌日、カーテンから差し込む光の眩しさにリアラは目を開ける、いつの間に眠ってしまったのか……

ふと隣でぐっすりと眠る人物を見てギョツとする。

一応リアラは王子の大事な客人として城に滞在を許可されている。それなのに朝になったらサーシャも来るというのに、こんなぐっすり寝ていて良いのだろうか？

シエルの髪に指を通す。

この髪はギルのもので、シエルのとは違い、髪質は少し硬く短めだ。顔も少年ぽさがぬけない部分があるシエルより、随分大人びていて、体も大きい。

まあ、もとよりリアラは外見にはあまり興味がないので、見た目がギルだろうが何だろうがどうでも良い事なのだが……。

完璧人間のギルなら、きつと朝になったらいないと思っていたのに……

ダメだなあと思いつつも、嬉しく思う。

でも、気持ちよさそうに似ているシエルには悪いけど、お前にはイロイロ恨みもあるからね！！

「シーエールー。朝だぞー。」

そう言いながらリアラはシエルの鼻をつまんだ。

「うみゃっ……！」

変な奇声をあげながらシエルが目を覚ました。

まだ眠そうなシエルの目がリアラの顔を見つめる。

「おはよーりーちゃん。」

でもさあ、もーちよつと色気のある起こし方をして欲しかったなー。

「

うるさい。」

せつかく起こしてあげたのに文句言うな。

それより、デューイを起こしに行かなくて良いのか？自称、完璧な側近さん？」

リアラが窓を指差しながらニヤつと笑った。

カーテンの向こうはもう十分すぎるほど明るくなっている。

シエルの顔が一気に青くなるのが分かった。

「やばい！ー！」

がばつと起き上がり急いで服に着替える。

リアラは慌てるシエルをの姿を満足そうに見ながらも、もう一度寝ようとベッドにうずくまった。

「どーしたの？」

シエルの声が上がらふってくる。

「んー。何だか分からないんだけど、腰が重くて体もダルイんだ。人間の体はたまにこうゆう事がある・・・不便でたまらないよ。」

「

それも今日のは特別ダルイ。

シエルにはリアラがダルイ理由が分かるからこそ何も言えなかった。昨日はリアラの意識がなくなるまでリアラを求めてしまった。

そんな自分の行動を今は少しやりすぎたな・・・と、ただ苦笑いを浮かべるしか出来ない。

「デューイの剣の稽古は午後までだったからそれまで休むといいよ。」

「

うん。」

その返事を聞き、リアラの頭をぽんぽんと撫でるとシエルは部屋を後にした。

カキーンカキーン

剣の音が響く軍の稽古場に一人の少女が現れる。

「おお、やってるやってる。」

そう言いながら稽古場に入る少女の姿は、男だらけのその場にはかなり場違いな服装だった。

「お前その格好でやるのか？」

デューイが眉を寄せながらリアラに問いかけた。

それもそのはず、リアラの格好は長い髪の毛は上の方で一本に束ねているものの、昨日とは少しデザインの違うワンピースを着ているだけだった。

剣の稽古をつけるにはふさわしくないその格好は、簡素な装飾の長い剣だけが目立っている。

「この格好が一番動きやすいんだもん。」

リアラはそう言うところとまわってみせた。

「まあいいか。」

それより、ならしはしなくていいのか？」

「大丈夫。」

「俺が勝つたら……。」

「はいはい、分かってるって。」

余裕そうな表情を見せるリアラにデューイはいささか納得いかないようだったが、それからは無言でリアラに向き合った。

「あ、ちょっと待ってください。」
構えようとしていた2人の間に、脇で見ていたギルが口をはさんできた。

「何だ？」

「その勝負、俺も参加していいですか？」

ギルがニツコリ笑いながらリアラを見つめた。

「何で？」

リアラが嫌そうな顔をギルに向ける。

「だって俺だけ仲間はずれって寂しいじゃないですか。」

「……………」

リアラは勝算のない賭けはしたくないタイプだ。

でも、デューイの手前、断るのもなんだか気が引ける。

「右手しか使わないんだったらいいよ。」

リアラがため息をつきながら言う。

シエルは左利きだ。

右だったかもしれないら引き分けに持ち込めるかもというささやかなハンデ。

「いいですよ。」

シエルは表情を崩さずに言った。

「おい、ギルの事はなんでそんなに警戒してるんだ？」

なんか俺がすげー弱いみてーじゃん。」

「あはは、違うよ。ギルは後から言ってきたからちょっと意地悪しただけー。」

リアラはそう言ってごまかしながらデューイと間合いをとった。

「いい？」

リアラがデューイを見つめる。

「ああ。」

あたりがシーンとなる。

それまで各自稽古をしていた衛兵達も手を止めて異形の少女と王太子の戦いを見つめていた。

「始め!!」

合図とともにデューイが一気に間合いを詰めた。

キーン!!

金属と金属がぶつかり合う音がこだまする。

リアラはデューイの鋭い攻撃を相手の力を利用して上手く流す。

「結構やるんだね。」

リアラは余裕そうな顔でデューイの攻撃を受けながら言った。

「それはこっちのセリフ。」

デューイの攻撃に変化が付きはじめた。

「へえ、単純な攻撃だけじゃないって事ね。

……でも。」

リアラがにやつと笑う。

「やっぱりまだまだだよ。」

そう言った瞬間、リアラはデューイの攻撃してきた剣を受け、弾き飛ばした。

一瞬の事で周りには何が起こったのかすら理解出来ない。

リアラはすぐにデューイの間合いに入り、切りつけた。

しんとした空気が流れる。

デューイの額からつうつと汗が流れた。

リアラの向けた剣はデューイの首筋ギリギリのところで止まっていた。

サアッと風が吹く。

リアラはゆっくり剣を引くと、腰の鞘に剣を収める。

「結構やるね。」

一瞬僕も本気出しかけちゃったよ。」

にこつと笑いデューイに手を差し出す。

デューイはリアラの手を取ることはせず、自分で起き上がると、すたすたと歩いて行ってしまった。

「ったく。」

リアラはあきれた顔でデューイを見つめていた。

「デューイは結構プライドの高いやつだからな。」

最後のあの一言がグサツときたんじゃない？」

ギルが近づいて来ると、ボソツとした声でリアラに言う。

それもそうだろう。

本気では戦っていないと言っているようなものなんだかたら。

「なんだ・・・そんな事か。」

リアラの体は人間の造りをしているとはいえ、普通の人間の能力よりは遥かに高い。

それが、人間相手に本気になりかけたとは、リアラなりのかなりの褒め言葉だった。

「では、主に替わって俺がお相手いたしましょう。」

ギルが剣を手に取り、リアラに向かってお辞儀をする。

デューイは少し不機嫌な様子ではあったが、腕を組みながら二人の様子をじつと見つめていた。

「始めっ！！」

合図とともに二人ともすばやく動く。

ギルの攻撃を先ほどのように、うまく剣で受け流していく。

しかし、繰り出される攻撃のすばやさや鋭さはデューイのとは格段

に違っていた。

2人とも本気を出しているわけではない。

しかし、負けたくない気持ちがりアラにはある。

ギルに関しては、負けてやる気はないといった様子。

その場にいるすべての人達が我も忘れて見入っていた。

デューイまでもが食い入るように見つめた。

それほどに、2人の戦っている姿は優美で、美しかった。

リアラのスカートはひらひらと揺れ、くると回ると回るその姿は、ま

るで不思議な舞をしているようで……

それでいて美しく時に妖艶に微笑んでいる。

見たことのない戦い方ではあったが、誰もが見惚れ、その場に立ち竦んで動けずにいた。

カキン！！

2人の剣が一層鋭く交わる。

「やっぱり剣だけじゃ面白みにかけるね。」

リアラがギルを見つめながら言葉をかける。

「えー。」

俺は剣だけで十分だよ。

そうじゃなきゃ、こんなに近寄って交える事出来ないじゃん？」

ギルもニコツと笑いながら返答する。

「……キモ。」

「ひどいなあ、リーちゃんは。」

「まあ、でもそろそろ終わらせよっか。」

リアラはそう言うやいなや、ギルの剣をずっと避け、風を利用してふわりと飛ぶと、後ろからギルに切りかかる。

すべてが一瞬の出来事だった。

デューイの時に見せた時より遙かに早くリアラは動いていた。

キン！！

風が動き、二人の動きがピタリと止まる。

「僕の負けみたいだね。」

リアラの剣はギルに見事に受け止められ、ギルの左手は鋭く、リアラの首筋に伸びていた。

リアラは剣を引くと鞘に収め、ギルを見た。

「でも、左手を使ったから、言うこと聞くって言うのは無効だからね。」

真剣な顔でリアラは言う。

ぶっ。

ギルが思わず噴出した。

「何？」

「いや……そんなに俺の命令聞くの嫌だったんだって思ってる……くくく……」

お腹を抱えて笑うギルにリアラはため息をつく。

「嫌に決まってるでしょ？」

ギルの頼みってるくなことないじゃん。」

そう言いながらリアラはデューイの方へと向かった。

「負けちゃった。」

てへへと笑うリアラにデューイは納得のいかない顔をギルに向ける。

「ギル。」

「はい。何でしょう？」

汗ひとつかいていないその顔でさらに笑顔を作りデューイ笑いかける。

「今まで、手を抜いて戦ってたんだな？」

まあ、デューイが怒るのも無理はないだろう。

「確かに、多少は手を抜いてやっていました。」

デューイが怒っているのにも関わらずしれっとした顔でギルは答える。

「しかし恐れながら・・・

いつも本気を出して戦っていて、もしもデューイ様に何かあったときに本気を出す力が残っていなければどうします。

そんな事態は作らせませんが、力を使い果たして戦うという事は俺には出来ないのです。

もしもの時がありますので。」

いけしゃあしゃあと・・・

リアラは笑いを必死に堪えていた。

「リアラ様との手合わせは、主の代わりに、ルージスタイン国のためにも勝たなければ思い、少々ムキになってしまいました。」

ギルのその言葉に、デューイはあ・・・と一つため息をつくと笑いを必死で堪えているリアラの方に向きなおった。

「それをリアラは最初から見抜いていたというわけか？」

「んー、まあそおゆう事かな？」

「・・・。」

「デューイ？」

「まったく、何年もギルを傍で見てきた俺が気づかないなんて・・・

・・・」

ギルはニツコリと笑う。

それは仕方ないよ。

ギルの体なだけでギルじゃないし・・・それにシエルってめーっっちゃ意地の悪い奴だし。

けれど・・・それもそろそろ分かるだろう。

だって、終わりの時はもう一刻と一刻と迫ってきている。

ねえ、シエル。

キミはどんなシナリオを描いてこの地に来たの？

その結末を僕が知るのもう少し後の事だった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8564d/>

世界のカタチ

2010年10月9日18時08分発行